

第1章 高岡短期大学の 黎明期と誕生

昭和61年春、高岡短期大学では、見るもの聞くものすべてが全く新しかった。先着の横山保初代学長を初めとする7人の先生とともに、先生も学生も初々しいし、もちろん校舎のエントランスも実習室も講義室も完成したばかりの清々しい香りに包まれていた。完成したばかりの真新しい校舎は新入生を迎え輝いていた。敷地内に植えられた細く弱々しい木々には黄緑色の葉が風に揺れていた。そして、新しい短期大学の教育と地域と連携した大学を築くと言う希望と緊張に包まれていた。

第一期生の授業は、私たち教職員と学生によって手探りの状態で進められた。新しい教科が開始されると、課題の意義と内容について学生との話し合いで緊張を伴った時間を過ごすことになった。この手探りの授業は、それからの高岡短期大学の方向を決定したように思える。

高岡短期大学創設期の思い出



元創設準備室長 柳田友道

高岡短期大学が本年創立二十二周年を迎えると伺い、私はまさに感無量といった感慨にふけた。創立当時富山大学長として偶々創設のお手伝いをさせていただいたのだが、その頃無理を承知でお願いして初代学長となっていた横山保先生をはじめ、積極的協力を惜しまれなかった何人かの方々はすでに他界されている。ここにこれらの方々の霊にあらためて深甚なる謝意を表明し、ご冥福をお祈り申し上げる次第である。

私が富山大学長に就任したのは昭和54年6月で、当時富山大学にとって最大の懸案は、高岡市にあった工学部を富山市五福の本キャンパスに移転することであった。この問題は十数年越しの未解決問題であり、移転遅延のために工学部の発展が経済成長の波に乗れず、他大学工学部に著しい遅れをとったという苦々しい内情もあった。この工学部移転問題が何故に高岡短期大学創設問題と関連があるのかということについては、「高岡短期大学十年史」(平成5年)の冒頭に詳述されているのでここでは省略する。

私の学長就任当時は、後述するように高岡に短大創設の方向が決まった頃だったが、富山大学としては工学部移転についての将来ビジョンはまだ固まっていなかった。富山大学は41年に工学部移転を機関決定していたのだが、歴代学長はこのことについて堀市長との話し合いをほとんどしたことがないということを知った私は、この大問題解決の切り口はここにあると気がついた。すなわち当事者である富山大学と高岡市との間の意思疎通なしに、この問題の円満解決はありえないと判断したのである。

ところが聞くところによると、堀市長は文部省に対して高岡高商時代からの数ある仕打ち(前記十年史参照)や、工学部移転の代替施設として4年制大学を要求した

が不問に付されたことなどに強い不満の念を持っていたと同時に、富山大学に対しても著しい不信感を抱いていたことを知り、市長との話し合いの設定はただ事では済まされないこともわかってきた。そこで私はこちらから何回でも高岡市に赴いて市長と面会すれば、そのうち話は通じるようになるのではないかと考え、気軽な気持ちで、事務官を同道せずに単独で市長訪問を繰り返した。その結果、初めのうちはぎごちない会話が続いたが、少しずつほぐれていって、1年近くも経つと堀市長の口から、ざっくばらんな文部省や富山大学に対する愚痴話も出てくるようになり、双方共堅苦しさがとれて、和やかな雰囲気での対話ができるようになった。私自身も堀市長は稀にみる頑固親父だという印象は持ちながら、気の優しい好々爺であることを知り、先輩として尊敬の念をもって接することができるようになったのも大きな収穫だった。

話を戻して私の学長就任の前年、富山県と高岡市が丸丸となって文部省に対し高岡市に国立短大設立の強い要請をしたところ、文部省はこれに応じて54年度に短大設置のための調査研究に着手することとなり、佐野孝吉名古屋工業大学長を主査とした調査会を発足させた。学長就任早々の私や堀市長も委員としてこれに参加した。本調査会は同年9月に検討状況をまとめたが、その中で教育専門課程については、(1)伝統的工芸品産業の発展に寄与する美術工芸家の養成、(2)実務的な経理・経営、(3)職業人に必要な実用的法律、(4)実際生活に必要な外国語の4課程として答申することとした。

55年6月、富山大学に「短期高等教育機関(高岡)創設準備調査室」が設置され、私が室長の任についた。同時に準備調査室勤務を任命された小林武事務官は、その後高岡短大開学後まで、まさに粉骨碎身の努力を積み重ね

昭和52年(1977)

主なできごと

富山県および高岡市が「高岡地域大学設置協議会」を設置し、12月に「高岡地域大学設立に関する陳情書」を文部省に提出。

昭和54年(1979)

主なできごと

(1.11)昭和54年度予算案で「短期高等教育機関(高岡)設置調査経費」が認められ、文部省において短期大学の設置調査についての具体的な検討を開始。(12.29)昭和55年度予算案で「短期高等教育機関(高岡)創設準備調査費」(創設準備調査要員 教授1)が認められる。

て私を補佐して下さったが、今は亡き人となってしまった。準備調査室発足後間もなく、上記調査会の佐野主査は柳田室長に対して、上記教育専門課程のうち(1)の項目について教育内容の試案策定を諮問してきた。そこで私は漆芸、金工、彫塑、デザイン等について、東京芸術大学、富山大学、高岡市、井波町の専門家6名の方々に委嘱して検討会議を開催した。

検討会議の席上ではまず「伝統」という語についてかなりの時間を割いて討議が進められた。堀市長をはじめ高岡市当局は「伝統工芸」の文字にある種の執念を持っておられた模様だったが、慎重審議の結果、前田泰次著「現代の工芸」、岩波新書の一節に述べられている次のような伝統論が参考とされた。

「伝統は生きて流れているもので、永遠に変わらない本質を持ちながら、一瞬も、とどまることのないのが本来の姿です。伝統工芸は、単に古いものを模倣し、従来の技法を墨守することではありません。伝統こそ工芸の基礎になるもので、これをしっかりと把握し、父祖から受け継いだ優れた技法を一層錬磨すると共に、今日の生活に即した新しいものを築き上げることが、われわれに課せられた責務だと信じます。」

この趣旨に基づき、本校ではその看板から伝統の語をはずして「工芸」とし、その中身に本来の伝統を生かすこととした。そして本校の教育期間は2年に過ぎないので、工芸家(作家)の養成を目的とするのではなく、工芸技術者(職人)の養成を目的とすることとし、同年10月に試案をとりまとめて佐野主査に報告した。

その間準備調査室は、8月に高岡市周辺の伝統工芸産業界の関係者を集めて懇談会を開催し意見を聴取したところ、新大学ではデザイン教育に是非力を注いでほしいこと、また卒業生の受け入れには全面的に協力することなどについても発言があった。さらに新大学の施設設備等の準備の参考にするため、私は輪島の漆芸、高岡の金工、井波の彫塑の作業現場を訪れ、専門家の方々から詳細に実情を伺った。

56年度に入ると、富山大学の創設準備調査室は「創設準備室」となった。準備室には創設準備委員会を設けて、

「高岡産業短期大学」(当時の仮称)の創設準備並びに工学部移転問題解決策について検討を行った。さらに新大学の「工芸」以外の専門課程についても富山大学の人文経済系教官による専門委員会を組織して検討を行った。

57年5月、新大学初の教官要員として、室長は麻生三郎氏を助教授(金工)として発令した。一方でキャンパス敷地の選定についてはすでに検討が始まっていたが、工学部の立地していた中川園町は敷地内を鉄道が横切っているし、狭隘で発展性に乏しく、教育拠点としては望ましくないということで除外され、二上地区案が浮上した。この地区で問題となったのは予定地が下水処理場の建設予定地に隣接していること、川を隔てて立地するパルプ工場の悪臭と排煙のことなどであった。しかし前者については地下埋没式の設計計画で臭気の排出は全くないこと、また後者についてはこの地域の年間の風向き調査の結果、ほとんど問題はないことがわかったので、57年8月に二上地区を高岡短大敷地とすることに最終決定した。

57年8月には文部省に「短期高等教育機関(高岡)に関する創設準備会議」が設置され、短大の基本構想として3学科(産業工芸、経営情報、国際教養)、8専攻コース、学生定員225人と一応決まったが、本案は58年2月に現行の2学科(産業工芸、産業情報)、7専攻、学生定員200人に修正された。そして最終的に58年3月、国立学校設置法一部改正により、「高岡短期大学」の開学が決定したのである。

そこでよいよ学長選考作業に入り、学識経験者と懇談を重ねながら、県や文部省とも協議が進められた。最も問題となったのは、学長は工芸関係者か、経済経営関係者かという点であった。討議の結果、国立大学の学長職という特殊な任務に当たる人材としては、やはり作家型より学者型がよいのではないかという方向に傾き、経済学者からの選考に絞られていった。そしてある先生の提言によって、大阪大学経済学部の横山保教授の名が浮上した。同氏が理学部数学科の出身で経済学者になられたという異色の存在であることを知った私は、同氏の学問的な幅の広さに魅力を感じて、数人の方々と相談した

昭和55年(1980)

主なできごと

(5.23)「富山大学短期高等教育機関(高岡)創設準備調査室設置規則」の制定。(6.1)富山大学に「短期高等教育機関(高岡)創設準備調査室」が設置され、同室長に富山大学長柳田友道が併任発令を受ける。

昭和56年(1981)

主なできごと

(4.1)富山大学に「短期高等教育機関(高岡)創設準備室」が設置され、同室長に富山大学長柳田友道が併任発令を受ける。(4.17)「富山大学短期高等教育機関(高岡)創設準備室規則」および「富山大学短期高等教育機関(高岡)創設準備委員会規則」の制定。

上で直接お目にかかり、お人柄にも惚れ込んで、学長就任をお願い申し上げたのであった。そして数日後、快諾の報を受けたときは本当に嬉しかった。

58年8月1日付けで横山氏は、まず富山大学の高岡短期大学創設準備室長に併任発令され、私の重荷は下りた。そして高岡短期大学が同年10月1日に開学すると同時に、横山氏は初代学長に就任された。開学後も私は横山学長に乞われて、運営委員会の一員としてしばらくの間お手伝いしたが、その間、旭川東海大学の黒岩靖司教授(デザイン)の採用人事についてお手伝いすることとな

り、旭川まで出掛けて行って、中々応じてくれなかった東海大学長を説得して、ようやく割愛していただくことができた。

私はこうして高岡短期大学創設時の思い出を書き記してみたが、その間、本当に多くの方々のお世話になったことを想起し、感謝の気持ちに溢れている。そして二上山麓の美しい自然に囲まれた高岡短期大学も、間もなく県内二大学と統合することになるが、統合後もその創設時の建学の精神が先に記した「伝統」の言葉通り、末永く生かされることを願ってやまない。

思い出すまに

—「高岡短期大学十年史」より再掲—



初代学長 (故)横山 保

昭和58年(1983)4月18日夕、私は東京神田の学士会館での会食の席に呼ばれました。出席者は…柳田友道富山大学長(当時高岡短期大学創設準備室長を兼務)、新田隆信元富山大学経済学部長(故人)、阿部統東京工業大学教授とそれに私……でした。私は柳田先生にはそのとき初めてお目にかかったのですが、他のお二人の先生にはすでに面識を持っておりました。新田先生にはもともと阿部教授の紹介でお目にかかったのですが、先生が経済学部長をなさっておられた頃、4年間ほど私は富山大学経済学部の併任教授を勤めたことがあり、旧知の仲でした。阿部教授は若い時から存じあげており、特に先生が東工大に来られてからは、共同研究、翻訳書の共同監修、生産性本部経営アカデミーの仕事等を通じ、先生とは親しい間柄でありました。

この日の話題は主に『地域に開かれた短期大学』として構想されておりました高岡短期大学の創設に関するものでした。食事のあと比較的長い時間にわたって意見の交換を行いました。『地域に開かれた短期大学』の具体的イメージをめぐり、かなりの議論を行っております。帰途、阿部先生と一緒に学士会館から神田駅辺りまで歩きながら、尽きぬ話に耽った記憶があります。若し要請

があれば、この新しく生まれ出ようとする高岡短期大学に参加しようという決意をしたのはこの直後のことでありました。

その年の7月17日の地元の朝刊は、文部省が私の高岡短期大学初代学長就任を内定し、8月1日付けで同短大創設準備室長に発令する予定であるという記事を報道しました。これには少々面食らいました。勿論それまでに柳田先生にお目にかかり、文部省の斉藤審議官とも面談しており、おおよその事態の進行を把握しておりましたが、それにしても報道の速さには驚きました。

10月1日高岡短期大学は誕生しました。3日夕刻より主に文部省の関係者を招いて高岡短期大学開学記念パーティーを霞が関ビルの東海大学校友会館で行いました。これには多くの方々に出席していただきました。当時の瀬戸山文部大臣、佐野事務次官、宮地大学局長、斉藤審議官をはじめ殆どすべての関係者の御参列を得、こもごも、この行政改革の嵐のもと、国家財政の極めて厳しいときに、規模は小さいとはいえ、独立した特徴ある短期大学として創立された高岡短期大学に対して、強い激励の言葉を頂いたことを記憶しております。6日には高岡商工ビルで富山県、高岡市、高岡短期大学共催の祝賀会

昭和57年(1982)

主なできごと

(3.5)第1回「富山大学短期高等教育機関(高岡)創設準備委員会」の開催。(以後、3回開催される。)(8.31)文部省の昭和57年度第1回「短期高等教育機関(高岡市)に関する創設準備会議」で「短期大学(高岡)の基本構想」が了承される。〔3学科6専攻2コース、入学定員225人〕(12.30)昭和58年度予算案で「高岡短期大学(仮称)」が認められる。「短期高等教育機関(高岡)創設準備費(創設要員 教授2、事務官2)」及び「開学経費(学長1、産業工芸学科(金属工芸専攻)教授1、事務官2)」

が行われました。このときは確か文部省からは斉藤審議官が見えられたと思います。

この創設期の思い出の一つは、技術教育課の方のお世話で、民主教育協会の「IDE 現代の教育」256号、に『高岡短期大学の構想』なる一文を草したことでした。これには、それまでに折りにふれて述べてきた考え方を一応整理して載せることができました。抽象的な信念として持っていたものを、多少とも具体的な構想として展開できたものと思っています。

昭和60年(1985)4月11日に二上の建設地で起工式が行われました。これには文部省から佐川文教施設部技術課長(現文教施設部長)が参加され、佐川部長のカマ入れ、私のクワ入れ、そして佐藤工業の代表者のスキ入れを行い、工事の無事完成を祈りました。佐川部長とは、足元の悪い建設現場で、建物の側壁タイルの色を決めるために、20メートル程離れた所に、工事現場の方に二上山を背景にタイルの見本を持って立ってもらい、タイルの色について検討した思い出があります。結果としては、ブ

ラウン系の、明るいけれども渋い、落ちついた彩りになりました。

短大正面の『大学通り』(この名称は島田元副学長によるものですが)を車で通りますと、低い丸形の講堂に続き、柱廊を両側に持った角張ったエントランス・ホールが見えてまいります。この丸と角のつながりに何となくローマのサン・アンジェロ(聖天使)城とバチカン正面を連想しておりましたが、ある機会にそのイメージを持っていたことを佐川部長に伺い感銘を受けました。そして昨年6月再びローマを訪れる機会がありましたので、近くに宿を取り、散歩がてらこの感じを確かめることができました。

昭和61年春には建物が完成し、学生を受け入れ、本格的な開学を迎えることになりました。

原稿の依頼を受けて筆を執ったのですが、必ずしも長い期間ではありませんでしたが、創設期の思い出は、あたかも走馬灯のように次々と現れ、尽きぬ思い出に浸ることになってしまいました。

回 想



初代副学長 徳平 滋

開学から学生を受入れるまでの僅か二年弱の間、副学長としての創設の業務に関係したに過ぎない。その短い間にも種々の出来事があったが、特に自分が心掛けていた事柄に関連することを思い出の一端として述べる。

副学長として着任した時には、既に短大の構想は決定され、学科の名称、専攻コース、教育課程等も具体的にできており、更にキャンパス予定地も定まり、準備体制も整えられつつあった。したがって、当面は富山県(出席者は副知事等)高岡市(助役等)短大(学長、副学長、事務部長等)三者による月一回の定例連絡会で情報交換して相互の意思疎通を図ることであり、また一方で、県下

の教育関係者や個人的な知人や地元の青年会議所の方々の懇談を通じて、新しい短大について地元関係者の理解を深め地域の人々の協力を強めるよう努めることであった。その時の感触では、短大構想に直接関与された人々以外は、短大の創設については承知していても、新しいユニークな考え方に基く構想の内容等については十分に理解されていないように思われた。そこで、県教育委員会や県高等学校長会との話し合のうえ高等学校長会との懇談会を設けて短大設置の趣旨と教育研究の方向の概要を説明するとともに、県下西部地区ならびに東部地区の高校進路指導教諭との「入学者選抜方法に関する懇

昭和58年(1983)

主なできごと

(2.14)文部省の第2回「短期高等教育機関(高岡市)に関する創設準備会議」で「高岡短期大学(仮称)の基本構想」の一部修正が了承。〔2学科7専攻2コース、入学定員200人〕(3.31)「国立大学設置法の一部を改正する法律」(昭和58年法律第14号)が公布され、昭和58年10月1日に高岡短期大学を設置し、昭和61年4月から学生を受け入れることが決定。(4.1)富山大学高岡短期大学創設準備室長に富山大学長柳田友道が併任発令される。(4.2)第1回「富山大学高岡短期大学創設準備委員会」の開催。(以後、6回開催)(8.1)富山大学高岡短期大学創設準備室長に大阪大学教授 横山 保が併任発令され、富山大学長柳田友道の併任が解除される。(8.31)財団法人高岡短期大学協力会の設立。(10.1)高岡短期大学(所在地 富山市五福(富山大学構内))が開学。(10.1)初代学長に横山 保(大阪大学教授)が発令される。

談会」を開いて短大の内容の周知徹底を図った。さらに、地元の経済界や教育関係の人々を招いて「開放事業に関する懇談会」を開催して、短大構想の具体的内容を説明して理解を得られるように努めた。

昭和五十九年九月に大学設置審議会設置分科会常任委員会において、本学の教育課程等を含む構想が了承され、開学に向って具体的に動き始めることとなった。この新しい構想に基く理念や仕組み、そのことに直接携わる人間の努力によって達成できることであるから、教員の選定がいかに大切であるかを自覚して懸命に努力する覚悟を決めた。自分なりの人事構想を固めるために、学長は勿論、運営委員の諸先生をはじめ先輩、知人等との話し合いを通して意見の交換等をする一方、従来から知己を得ていた東京大学や一橋大学等の諸先生を訪ねて面談するなどの努力を重ねた。大学は、基礎となる知識、技術、ものの見方、考え方を学ぶとともに、よりよい刺激によって自らに内在する感性等を磨き、自ら創造する意欲を育て、それを展開する能力を養うところであり、単なる技能訓練の施設でないとの認識に基づいて、教員の選考に当るようにした。新しい構想を実現させるための具体的人事としては、産業工芸学科では優れた業績のある人と教育研究に強い意欲のある若い人、産業情報学科では企業等における優れた実務経験がある人と自らを伸ばそうとする意欲の強い若い人と組合せを基本とすることが良いと考えた。

昭和六十年十月に運営委員会に人事専門委員会が設けられ、副学長がその責任者となり具体的な教官選考が進められることとなった。運営委員会や人事専門委員の諸

先生方の意見を聞く一方で候補者の推薦をお願いし、推薦された人に加えて各方面から紹介された人々については、自分なりの構想に合致しそうな人には面談し、新しい短大のあり方を説明し、本人の考え方や意志を確認するように努めた。また、現職にある人の場合は、所属長や職場関係者とも面談するなどして、人物や職場での評判等についても聴取するなどした。そのため富山県下はもとより東京、大阪、筑波などを飛び廻り、ときには吹雪などの悪天候で自動車が立往生しかかったことも今では懐かしい思い出となっている。これらの具体的人選については、人事専門委員の西大由先生(東京芸術大学教授)平田純先生(富山大学教授)藤澤俊男先生(大阪大学教授)等に大変お世話になった。工芸関係に余り縁がなかった自分は、西先生には特に助けていただいた。西先生から専門分野については自分が責任をもつが、教員としての適性や意欲等については副学長自身の眼で確かめるよう忠告され、そのうえ、当時東京芸大の学生部長職であったので推薦された東京芸大出身者を学生部長室に集めて、同室にて全員の個人面接ができるよう配慮していただき、心から感謝している。また、私自身が思い悩んでいたとき、「世の中の動きも、世の人全員が動かしているのではなく何パーセントかの人が本気になって頑張ることによって多数の人が納得し、同調してその方向に動いていくのではないのでしょうか」と励まされた。

教育は、人間の人間に対する直接の営みであるから、その適任者を選ぶ仕事は難しいのは当然であったが、その結果に大学設置審議会の判定が可と出るまでの心労も大変なものがあった。その当時に偲びながら筆を擱く。

あの頃 —開学早々の頃だった—

「雨晴し」の空に浮かぶ立山連峰

あの頃、初めて高岡に住んで雨晴の空に浮かぶ立山連峰の美しさにうたれた。この地で、万葉文化が大切にされていることには深い共感をもった。——私の出身地は

大和の国なので。

大伴家持の詠める

磯の上の つままを見れば 根を延(は)へて
年深からし 神(かむ)さびにけり



第2代副学長 島田 治

昭和59年(1984)

主なできごと

(1.25)昭和59年度予算案で副学長1、産業情報学科教授1、事務官2、の整備が認められる。(12.29)昭和60年度予算案で産業工芸学科教授2、産業情報学科教授2、一般教育科目等教授1、事務官7、の整備が認められる。

大学の中庭にも、つまま(タブの木。?)が茂っている。
それから、呉羽丘陵の西と東の違いも知った。いろいろな意味で。

また、これは全県。パーティの終りには、必ず万歳三唱をやることにも慣れた。パーティの祝儀が、一律、松竹梅(日本酒)二本と決まっていた。余計なことを考えずに済み、大いに助かった。結婚式には、蒲鉾の大きな鯛が出ることも知った。誰かさんと誰かさんは、よくその尻尾(蒲鉾だから、味は頭尾均一)をお茶受けに持って来てくれた。――

雪は、私が居る間は、大したことはなかった。大学でも雪上車を買わねばと思っていた(本当ですよ。?)が、その必要はなかった。

卒業証書は、いささか上質紙の、いささか大きいのがいい?

第一回卒業生を送り出すに当たって、そうだ、卒業証書はどんなのがよいかと云うことになった。この時のものが後をも縛る。東大その他のサンプルも取り寄せた。中には、卒業証書とは、単なる証明書と云わんばかりに、B5版のそっけないものもあった。卒業証書には、大学として学生を送り出す思いをいっぱいに込めると云うことで衆議一決。上質の大型の証書となった。当時、学長の横山先生も特に御熱心だった。

バス停は県内随一?

ある雪の日、大学の執務室から、ふと外を見ると、校庭の前のバス停で学生たちが寒さに縮んでいた。特に女子学生が気の毒にみえた。これはいかん。雪国では、囲いのあるバス停は必需品だ。早速、何とかしなければと行動開始。ところが、バス会社だけでは粗末なものしかできないと云う。では、大学のお金でと考えると、道路は県道でその上に国立大学の予算で作った国有財産のバス停は置けないと云う。では、県庁に頼んでも、このバス停だけ県のお金で作ると云う訳には行かない。結局、県の法人たる大学協働会とバス会社の御協力で当時としては県内随一のバス停ができた。バス会社の人も、自動ドアを付ける設計までして下さったが、ドアを付けるとレッキとした建築物になってしまうので、路上建築は不可として没案。それにしても、バス会社の人も、県庁の人も、市の人も、関係の人々は、挙って熱心に協力して

下さった。この大学が地域に愛されている大学と如実に感じた。皆様方に感謝を捧げたい。

また、西の方の国道から大学への曲がり角にも、確か“大学通り”なる標識を建てて頂いた。

富山県に感謝

当時、県は、この大学の誘致条件と云うか、設置が決まったときの約束の実行に並々ならぬ努力をして下さった。周辺道路の整備、橋梁の新設など、もちろん県御自身の元からの計画に基づくものであったが、着実に実行して頂いた。とりわけ中沖知事のこの大学に対する御尽力には感激した。今さらながら、厚く御礼申し上げたい。古い言葉で恐縮ながら、民主主義の現代にもいっそう必要な「真の牧民官」の称号を奉りたい。

月点心 凍てつく街を 通りけり

思わず、こんなもじり句が口を突いて出てしまう夜だった。高岡に赴任して間もない頃だった。丁度これも赴任したばかりの事務部長さんと、近くに伏木と云う街があると云うことで、一度行って見ようと、夕食に出かけたことがあった。暗い、知らない街をぼとぼと歩いた。ようやく一軒のスナックを見つけて、とにかく飛び込んだ。なにせ、私とて、その頃は、まだまだ50代半ばの青年(?)だったが、やっぱり寒かった。

創己祭

第一回入学の学生諸君が、頑張ってくれた。開学初年度。夏休み頃までは、学園祭をやろうと云う機運があまりなかった。どう云うことかと思った。でも、幾らかのサジェションが機となったのか、第一回入学の諸君が猛然と立ちあがった。夏休みも終わる頃は、当局側が随分突き上げられるようになって困ったが、嬉しかった。創己祭とは、すばらしい命名だと思った。真に新しい理念の大学、新構想大学にふさわしい、そして、決意に満ちた命名と感じた。関係学生諸君の討論の結果であった。その意気で第一回学園祭は、見事な成功を見た。当時、中心となった学生諸君の顔が、今でも目に浮かぶ。もう随分な小父さん、小母さんになったかな。いや、まだまだ若いかな。!

昭和60年(1985)

主なできごと

(10.3)昭和61年度入学選抜試験(推薦入学、社会人特別選抜)を富山大学工学部構内(高岡市中川園町)で実施する。(最初の学生受入れに伴う入学試験)(~10.4) (12.28)昭和61年度予算案で産業工芸学科教授5、助教授4、産業情報学科教授5、助教授4、一般教育科目等教授4、開放センター教授1、事務官11の整備が認められる。

もののふの 八十(やそ)をとめらが くみ乱(まご)ふ 寺井の上のかたかごの花

高岡の人ならどなたも御存知の万葉集は大伴家持さんの歌。この“かたかご”の花が産業デザインの小関教授制作で学章になった。近頃、我が家の庭でも、そうだ、“かたかご”の花を咲かせてみんとて、やおら、ホームセンターで“かたかご”、つまりカタクリの苗を数本仕入れて植えた。いつの間にか消えた。聞けば、この花は、丁寧に3年育てないと咲かないそうだ。思い出に浸るにも、技術と丹精が必要だ。

仮住まいの教官住宅 申し訳なかった。

開学当初、まだ大学のための公務員住宅が建っていない。遠くから御赴任の教授各位には、やむを得ず地元で斡旋願った仮住宅に入って頂いていた。しばらく、数年のご辛抱とは云え、少々粗末に過ぎ、持家率(家持率ではない。)日本一の富山県で、折角迎えた優れた人材がこの住まいとは思って、申し訳なさでいっぱいになった。実際、現地を見に行くと、愕然とした。私自身は、その当時単身赴任だったので、暫く富山市の古い公務員住宅から通い、後、大学近くの小さい民間アパートを借りて引っ越した。

開学記念式からいつも国旗がはためいている！

開学記念式に国旗と校旗がはためいた。以後、国立大学として常に国旗と校旗がはためいている。加えて、外国の大切なお客様が見える時には、その国の国旗を掲げる。非常に感激して頂くようだ。本当の国際交流は、こう云うことから始まる。でも、風にはためく旗は、一月もするとぼろけて代えなければならない。ケチるなかれ、その経費。

入学試験の面接実施

入学志願者が確か1400人程度だったか。その全員を50人ほどの教官で面接するのは並大抵のことではなかった。でも、本当に総合的な、いい選抜を行うには面接が一番だ。教官は、この学生なら本当に鍛えてやりたい、

育ててやりたいと云う学生を重んじる。学生もまた、大学と教官を選択する権利に、具体的に大学の生の息遣いの一部でも感知する場となる。教官にも選ぶとともに、選ばれる方でもあると云う緊張が走る。

これが実のある教育をモットーとする、高岡短大だと思っただことであつた。



洗心苑あれこれ

広い校庭の奥に大学会館が出来た。国の予算上は、どういう費目・名称だったか忘れてしまったが、立派なものができた。確か、中曽根内閣の時だった。財政政策上、急に大型補正予算が組まれることになった。その際、もう少し後年度建設の計画だったのを前倒して実現した。

名称は、当時の横山学長にお願いして洗心苑となった。洗心の由来・出典は、どなたか詳しい人に委ねたい。当時、この洗心苑の、第一の目的としたのは、教官各位の密接な教育交流と研究交流の場とすることであった。それも、四角ばった形式的な交流ではなく、寛いだ、気楽な、打ち解けた、それだけに率直で実り多い交流と云うか、相互刺激・相互激励を狙いとした。第二に、学外からの研究者の来訪宿泊に供する上質のホテルとすることを目的とした。それから、座敷、お茶室などは、体育館の茶室の上級施設として。ある日、課外時間、来賓の接待に、お茶クラブの学生さんに茶の席を頼んだら、双方から大変感謝された。来賓は若い学生の作法に感激し、学生は、馴れた仲間同士でない、真剣勝負の練習が出来たと喜んでくれた。

ともあれ、当時、洗心苑が出来て、やっと大学らしい思いをもった。

昭和61年(1986)

主なできごと

(1.7)高岡短期大学新営第一期工事(講義・管理棟、研究棟、講義演習棟、実験実習棟、エネルギー棟)が竣工。(2.23)昭和61年度入学者選抜試験(一般試験)の学力検査を高岡市立志貴野中学校で実施。(最初の学生受入れに伴う入学試験)(2.24)同試験の実技検査を富山大学工学部構内(高岡市中川園町)で実施。(2.28)「高岡短期大学学則」を制定。(3.2)昭和61年度入学者選抜試験合格者を大学建設地の高岡市二上町で発表。(3.6)校舎が竣工したことに伴い、高岡短期大学を高岡市二上町に移転。(4.5)短期大学開放センターの設置。(4.15)昭和61年度入学式(第1回)を挙行。(5.31)開学記念式典・祝賀会を開催。(10.3)昭和62年度入学者選抜試験(推薦入学、社会人特別選抜)を実施。(～10.4、62.1.20同合格発表)(10.31)多目的グラウンド、テニスコート整備工事の竣工。(11.22)第1回創己祭(学園祭)を開催。(～11.24)(12.12)体育館新営工事の竣工。(12.30)昭和62年度予算案で産業工学学科教授4、助教授4、助手4、産業情報学科教授2、助教授4、助手4、一般教育科目等助手1、事務官10の整備が認められる。

こなたの遠く離れた地にて想うこと



初代事務部長 江田晴夫

1. 始まりはここから

国立高岡短期大学の誕生は各方面から注視されました。他の大学・短期大学、地方公共団体などから多数の問い合わせや説明会への出席依頼がありました。「……、また社会に開かれた短大のモデルケースとしての国立高岡短期大学、……。」 — [統十年後]・グループST = 代表邦光司郎・昭和58年11月光文社刊 — と紹介されました。

これに先立つこと昭和54年頃から、富山大学工学部の富山市移転に伴う地元要望事項として、短期高等教育機関の高岡市設置が検討され始められていました。

全国的な大学紛争は漸く沈静化しつつありました。社会から距離を置いていた高等教育機関に対する批判・要請に応えながら、新構想の筑波大学などにみられるような改革が行なわれ、一県一医科大学の配置計画が推進されてきました。

いっぽう、地方における伝統的工芸文化を拠りどころとする地場産業の停滞・衰退は顕著なものがあり、このような地域背景を踏まえながらも、狭い視野から脱却した先進的・学術的かつ広域的・国際的な教育機関づくりが模索されていたのです。

2. 五福から中川へ —開学準備に明け暮れて—

この時期、私立の短期大学はかなりの数ありました。国立としては大学併設の短期大学はありましたが、単独の短期大学は皆無でした。参考となる前例がみあたりません。しかも、日本の伝統技能の振興に寄与できる地域密着型の国立高等教育機関を創設することは未知の空間に不確定なものを手探りで構築していくに類することでありました。

歴史の流れに伝承され、徒弟制度に墨守されてきた技能を、いかに学校制度のなかに位置付けて、どのように教育課程として編成するのか。このような伝統工芸を底支えするために、普遍的付加価値を創造し得るデザイン力、国外も視野に入れた市場進出を図り得るビジネス能

力などを教授する未来指向の方法が検討されました。

しかしながら、小規模・短期とはいえ単独の高等教育機関を設置することは、経費的にも定員措置の面から、諸般の事情から極めて困難な条件下にありました。

厳しい行財政状況のなかで、文部省(当時)、富山大学、東京芸術大学、大阪大学、そして、富山県、高岡市、地元公立学校、地域企業、地区住民の人々など、沢山のご支援、ご協力、ご鞭撻がありました。だからこそ、当学の建設・整備が確実に進捗していったことを思い起し、それぞれの決断に対して改めて感慨を深くするものであります。

3. 中川から二上まで —学生受け入れに向けて—

そして、諸条件不備にも拘らず、加重な業務によく耐えて自己の職責を着実に遂行してくださった、あの時期の教職員の方々に衷心から敬意を表するものであります。

敷地は当学設置の決定時までに確定していませんでした。学舎の建設はほぼ順調でしたが、開放センターの根拠付け・位置付けなどに試行錯誤しました。教職員住宅は各人が着任した後も、暫らく確保できませんでした。試験場の設定・試験要員の派遣要請に右往左往し、学生募集要項作成などに徹夜したものでした。その他、限りなく……。

帰宅はほとんど深夜でした。真夜中に宿舍周辺の除雪作業に汗し、百足や守宮の訪問にびっくり跳ね起きたりもしましたが、窓から入ってくる風は自然がいっぱいでした。

忙中閑あり、しばしの憩いに平静さを取戻したものです。雨晴海岸から眺望する雄大な立山連峰、黒部峡谷の残雪を愛でながらの露天風呂、五箇山の深緑に佇む懐かしい合掌家屋、瑞龍寺の造形美豊かな技巧的骨組み、井波の静寂な町並に洩れ響く木彫の音、高岡大仏の優しく包みこんでくれるお顔など、峻険な景観や勝れた伝統文化に接した後、うまい酒と肴に舌鼓を打ち、時には前後不覚に酔い痴れたこともありました。

昭和62年(1987)

主なできごと

(2.22)昭和62年度入学者選抜試験(一般選抜)を実施。(～2.24、3.7同合格発表)(3.10)高岡短期大学校友会の設立。(3.25)図書館新営工事の竣工。(4.15)昭和62年度入学式を挙行。(7.15)創己会(学生自治会)の設立。

4. はらかな二上の空へ想うこと

当学在職期間は昭和58年4月から、昭和61年5月まででした。あれから二昔が流れました。20年の歳月は新生児をも成人にするものです。しかし、その出自と歴史は誰にも否定出来るものではありません。当学の創設、国立大学法人への転換、そして新しい大学芸術文化学部への変貌は時代の趨勢でありましょう。歴史と伝統を継承しながら社会の潮流に適應してゆくことは、新しいものを創造していく要諦であります。僭越ではありますが、当学『建学の理念』を忘却の片隅に埋没させることなく、

将来のさらなる充実発展の礎としていただければ幸いです。希望するものであります。

高岡短期大学の発展的再出発に満腔の祝意を表するとともに、数多ある教育機関の中にあっても特色ある確固とした地位を占められることを祈念し、現教職員の皆様のご健勝、ご活躍、ご研鑽を期待するものであります。

色褪せた頁を繕きながら、老骨が思いつくままに記述しているので、記憶違いなどによる誤りがあるかも知れません。ご宥くださるようお願いして擱筆します。

高岡短期大学の思い出



元事務部長 川崎 晃

昭和61年6月1日付高岡短期大学の事務部長の発令を受け、赴任しました。

在任期間1年10ヶ月の短い期間でしたが、事務部長として、まさに学生と同じ名誉ある第1期生でした。在職中の思い出のいくつかをお話します。

事務部長として、構内警備に多少の懸念はありましたが、在職中の事故は、まったくありませんでした。

このような特色ある建物のため、私学の関係者等が常時見学に来学し、その応接のため庶務担当者はうれしい悲鳴を上げていました。

校舎などの建物について

初めて新校舎を見た印象は、中世の西洋建築を想像させる回廊のあるこじんまりとした凛酒な建物でした。特に天井の高いエントランスホールや開放センターの建物が印象に残りました。この建物の建設は、すべて文部省の直営工事であり、赴任時には既にその大半が完成しておりました。

唯一、非常勤講師宿泊施設が建設途上であり、島田副学長ともども、設計段階で文部省に陳情したこと(箱型でなく一部を円形に)を記憶しています。

また、開かれた大学のイメージどおり、短期大学には囲障がなく、路上から誰でも自由に構内に入ることができるユニークなもので、校舎正面の広場は、まさに公園のように開放的でした。

管理運営などについて

(教授会)

学長・副学長及び学科長を中心に10数人のメンバーで構成し、月1回開催されました。少人数のため、まとまりがよく、議事は短時間で終了しました。

(参与会)

新設の短大として 知事・富山大学長・経済界代表などによる第1回の参与会が開催され、大学側から近況の説明と参加のかたがたから意見をいただきました。

(公開講座)

副学長が講師として、当時としては、先進的なパソコンの公開講座を開き、夜間10数人の主婦が熱心に聴講して、大変な盛況でした。内容はベーシックなどで、今の“お絵かきソフト”とは異なり、各自がプログラムを作

昭和63年(1988)

主なできごと

(1.18)学科主任の名称を学科長に変更。(1.29)高岡短期大学同窓会の設立。(2.16)校章の決定。(3.19)昭和62年度卒業証書授与式(第1回)を挙行。(3.25)非常勤講師宿泊施設(洗心苑)新営工事の竣工。(4.1)専攻科地域産業専攻の設置。(4.8)昭和63年度入学式を挙行。(4.13)昭和63年度専攻科地域産業専攻入学者選抜試験を実施。(4.16)同合格発表(最初の専攻科学生受入れに伴う入学試験)(4.25)昭和63年度専攻科地域産業専攻入学式(第1回)を挙行。

成する結構難かしいものでした。わたしも時々聴講生になり、この公開講座に加わりました。また勤務終了後副学長からベーシックの特訓を受けたりもしました。当時の懐かしいノートが、今も手元にあります。

バス停の設置について

短大前のバス停を設置する際に、かなり県に無理なお願いをしたことを記憶しています。学生のほとんどがバスを利用しており、冬季 雪の多いときは、吹きさらしのバス停で多くの学生が待機するようなことになるので、風雪を直接受けたくないような箱型の停留所の設置を、県にお願いに行きました。

県の意見は、道路上に停留所を設置する場合は、「屋根と柱」で「箱型」の設置は認められないということでしたが、熱心に陳情した結果理解を示してくれました。

冬季になり風雪の強い日 学生たちが停留所で歓談しているのを見て、県のはからいに感謝したことを記憶しています。

高岡の史跡散策などについて

在職は、短い期間でしたが、仕事を離れても高岡は、思い出多い街でした。

国分寺跡や大伴家持の歌碑、勝興寺や瑞竜寺の名刹、古城公園 また義経岩や海岸に3000メートル超級の山々が直接映る雨晴海岸の絶景、日本一の銅器の街、食通には忘れることのできない氷見、新湊の新鮮な魚・ホタルイカやズワイガニ、そして伏木の夏祭りなどなど 今でも楽しく思い出されます。

休日には、よく愛犬(2匹のポメラニアン)を連れ、散歩したものでした。

いま、カメラを趣味でやっており、贅沢なくらい ふんだんにあった当時のシャッター・チャンスが恨めしく思い出されます。

以上のほか、晴れやかな第1期生を送り出したこと、後援会事業を発足させたこと等の思い出がありますが、在職から20年余を過ぎており、記憶も定かではありませんので、この程度の記録にとどめさせていただきます。

創設準備室の思い出

高岡短大が創立したのはたしか昭和58年の秋頃だったと記憶している。それ以前は「短期高等教育機関(高岡)創設準備室」という長たらしい名称で富山大学の五福キャンパスに設置されていました。私が初めて短大との出会いを持ったのは昭和57年の5月のことでした。それ迄長年勤めていた高等学校を辞し短大設置の任務に就くよう指命され富大の管理棟に出向したのが最初でした。当時の事を追憶すると実に懐かしく感無量なものがあります。ここで簡単に高岡に於ける高等教育機関の変遷についてふれてみたいと思います。昭和の初期までは高岡高等商業学校(旧)が高岡市中川に設置されていたが、第二次世界大戦の勃発によって急遽工業専門学校(旧)と改編され、更に戦後は新制度による富山大学工学部と時代の要望と共にその内容も大きく変えながら運営されて来たのである。現代社会の要請は国際環境の著しい変化と激しい競争の波に押され急速な社会構造の変革を余儀無くされ21世紀に向けての発言は独自の産業基盤が必要と特に地方の特色を出す地域産業の振興が大きなウエイト

を示し全国各地でそれぞれの伝統産業育成が声を大にしてクローズアップされて来た。富山県では高岡地区が古くから根付いていた金属工芸(銅器)と漆工芸、砺波地区の木工芸(木彫刻・挽物)の伝統産業が発達しており、全国的にも広く知られた産地を形成していることは周知の通りである。昭和50年代に至り富山大学が富山市五福のキャンパス集中を計るという国の指令に基づいて高岡にあった工学部は撤収され全学部が五福に統合される事態となり、これを機に先ほど申し述べた地域社会の発展を期し是非とも独立した大学の実現を計ろうとする運動が興ったのである。高岡地域に於ける発展の鍵はなんともいっても大学を基盤とした教育機構の充実こそが根本であり大袈裟に言えばあらゆる文化文明の開化が発信されると考えられた。特に高岡ではこうした要求が背景となって国や地方の機関に対して強力に働きかけ、昭和54年には設置に関する調査会が当時の文部省内に開設され、やがて栄えある大学の創設が決定されたことは誠に喜ばしいことでした。ここまでに至る紆余曲折は言語に



名誉教授 麻生三郎

絶するものがあつたと聞いているが、地域の人たちの逞しい行動力と飽くなき熱意の結果がこれを生み出したものと評価されるでしょう。

私が最初に訪れた印象を申し上げると、真新しい表札の掛かった部屋に第一歩を印したとき、何ともいえぬ重圧感と生々しい誕生の息吹とでもいうか新しい緊張を諸に感じたことを覚えています。室長は当時の富山大学学長の柳田友道先生で兼務され、事務職員として江田総主幹、小林主幹と他に4名の事務官の人達が執務をとっておられたと思う。担当の教官として私が最初の赴任になり、他に富大の教育学部の先生が協力の形で準備室の陣容が構成されました。草創期のスタッフはどうしても少数精鋭にならざるを得ません。

昨日まで長期に亘って勤めて来た高校教育の現場から一挙に大学の創設業務に転ずるといことは私にとってあまりにも極端な方向変換であり、しかも限られた短い期間で全く新しい世界に飛び込むことの大胆な行動は正直言ってまっとう出来るのだろうか日が重なるにつれて心配になって来たのです。ともすると自分自身を見失い勝ちになったことも何度かありました。仕事と自分との葛藤をどのように理解してゆけばよいかの自問自答を繰り返す混乱期が或る程度続いたことがありました。しかしこうした日々の連続がいつしか現実的の大学像の把握に

向って近づいてゆくことが自分なりに意識するようになると、自分の存在感が大きく安定して直視出来るようになったのです。未知の偶像をどのように現実の形態に結び付けるか組み立てと破壊の繰り返しを重ねながら徐々に形成されてゆく大学像の追究に専念出来たことを自負している。

昭和58年10月待望の大学発足の日を迎えた高岡短期大学は全国で唯一の独立した短大である。初代の学長に横山保先生(故)が就任されると共に産業工芸分野では黒岩、三船、中川の諸先生が赴任され、産業情報分野には澤本、石井、木村の各先生方が着任され強力な教授陣によって準備室の機能が磐石となったのであります。一方二上山麓のキャンパスでは本格的な建設工事が始まり近代的な学園構成が着々と進められ毎日にその全容が現出されて行くと共に、準備室も五福から高岡市中川にあった元工学部の旧校舎に事務局が移され、建設促進に全力を挙げたのである。昭和61年4月の第1回入学生を受け入れるまでの準備室の作業内容は残念ながら省略させて戴くが、僅かな期間の中で教育体系から施設設備等の山積する課題を一つ一つ着実に取り組んでおられた先生方の涙ぐましいご活躍を思い浮かべながら温かい心遣いにご支援を賜ったことを感謝申し上げ、私の準備室時代の思い出とさせていただきます。

開学断想



名誉教授 阿部 統

私が、高岡短大と関わりをもつようになったのは何時からだったろうか？二十年以上も前のメモ帖を繰ってみて、昭和58(1983)年3月に富山大学経済学部長だった新田隆信先生が突然東京工大の研究室に来訪されたのがきっかけであったのを思い出した。

それ以前に富山大学に非常勤講師として出講した際ご拝眉をえてはいたのだったが、お話の内容は思いもかけぬものであった。富山大学工学部が高岡市から富山市内にキャンパスを移すことになったので、さまざまな議論の末、ようやく国立の短期大学を新設することに合意ができた。ついては開設に当たって、発足・運営の中心となって面倒をみてほしいとの依頼である。当時私は一年後に東工大の定年退官を控えていたので、それを見越してのご厚志と拝察したが、私は沖縄が本土復帰する前か

ら同地に関係があり、琉球大学にも出講して定年後は同大学に赴任することを約束していたので、恐縮しながらも辞退申し上げた。戦争の影響で沖縄には私の年齢層の男性が極端に少なかったので、そうすることが私の宿命のように感じたのも事実である。そして大阪大学教授で畏友の横山保氏をご紹介した。暫くして横山教授からお引き受けしたとの連絡があり、何よりの人事と心から喜ばしく思った。

その後間もなく、横山・新田両教授から重ねて、せめて大学が発足するまで、開学準備の委員会に参画して協力してほしいとの鄭重な依頼があった。東京から沖縄と富山に行き来するのはためらいもあったのだが、いささか責任も感じて承諾した。主として富山大学で開かれた会議で、キャンパスの位置、学部の編成はじめ大学の特

質と骨格を決める真剣な討議が繰り返された。その過程で印象深かったのは、地元の識者の委員の方々が、地域の特性と将来展望を目指して、情報・外国語・伝統工芸を専攻する学科の設置を強く希望されたことである。一見相互にあまり関連がないように見えたこれらの3専攻に、横山教授は深い理解を示した。そうこうして翌年10月1日開学のための骨子が定まって記念の集いが開かれ、昭和61(1986)年3月末に開学式を行うことが確定して具体的に建設その他の準備が始まった。

こうして昭和60年度中には無事発足の見通しが立ったので、開学とともに私と高岡短大の関わりもほぼ終了したと思っていたところ、横山教授から大学に赴任してほしいとの内々の要望があり、学長に正式に就任されて後、9月に公的に依頼をいただいた。私は詳細を知らないのだが、その間事務的にも琉球大学といろいろ折衝があったらしい。たまたま10月に綿貫民輔国土庁長官から、当時エネルギー庁の幹部をしていた教え子を通じて会いたいとの連絡があり、沖縄開発庁長官を兼ねておられたので多分沖縄に関連しての話だろうと推察して芝の某所でお眼にかかったところ、最後に「私の故郷もよろしく」と言われたのには面喰らった。あれこれのいきさつの後、私が短大に関連書類を送ったのは11月半ば、正式に移籍の辞令を受領したのは翌年の4月1日であっ

た。

短大では、同僚の方々が私の専門を超える多彩の人たちであったのでいろいろ刺戟をうけ、楽しく過ごすことができた。とりわけ、沖縄も伝統工芸が盛んな処なので門外漢的な関心をもっていたのだが、折々に耳にする関連する逸話は興味があった。ただ今でも申し訳なくかつ残念に思うのは、当時病床にあった老母を抱えていたので実質的に東京から通勤する形になり、学生諸君に個別に接する機会が少なかったことである。当初、在任期間は四年の積もりでいたのだが、横山学長から自分の任期が終わるまでつき合ってほしいと言われ、一年延長した。最終講義に「越中と琉球」と題して、北前船による前田藩の松前昆布と、琉球王朝をダミーに使っての島津藩の中国から輸入薬草が交換されて、富山の製菓業の基盤を支えていたという史実を紹介できたのも思い出である。

独りよがりの記憶に頼っての内容なので誤りも多いと思う。高岡短大が発展的に改革されて二十年の歴史を閉じると聞き、今更のように新設の理想と熱意に燃えていた当時の教官・職員の方々の意気込みを思い起こす。あらためて横山前学長への惜別の思いを深くしながら、同窓の各位の活躍を期待している。

回 想



名誉教授 中川 宏

大学構内の樹々の若葉が萌え出す頃、昭和60年に石井、木村、沢本、三船、中川の5教官が任命され、既着任の麻生、黒岩の両教授に加え7教官になった。次年度の学生受け入れの準備に毎日遅くまで懸命の作業が続いた。わが高短大の校舎の完工は一年後の来春で、それまでは富山市に移設が決まっていた高岡市中川園町の富山大学工学部の工業化学棟二、三階がしばしの仮校舎として使用された。やがて夏になり格別に暑い毎日が続いた。扇風機は一日中休むことなく回転し続けた。一方この構内では工学部本館(旧高岡高等商業学校)の立派な木造建築から、取り壊し撤去が始まり、逐次他の工学部の各学科の木造、鉄骨棟の撤去になった。しばらくそれらの撤去騒音と暑さに耐えざるを得なかった。余談ながら本館の木造物は貫碌があり、使用材料もさもありなんと

想像していた。主柱、梁、桁などさすが断面も大きくこれから再加工して記念品にならないかと考慮されていた。しかし、その樹種は北米産のダグラスファー(通称「米マツ」)と判明した。

昭和60年4月1日には学長、副学長と主要事務職員および教官7名が揃ったところで運営委員会、ついで運営委員会の補助機関として全教官による教官会議が開かれ、学内規定の整備から教育内容の検討、第一回入学試験の実施方法、教育設備機器の選定、図書館の書籍の選定作業に至るまでに及び、ほとんど毎週のように開かれた。さらに各学科、専攻ともそれぞれのカリキュラムの編成に力が注がれた。ここではカリキュラムの方向は大学設置審議会に定義した基本構想に唱えられている

(1)大学レベルに立脚し (2)豊かな美的感覚とその発

現方法を醸成する (3)自然科学、工学に基づく計画の設計製作評価などを創り出す体系 (4)審美を高める精緻な手法の体得、これらカリキュラムの内容を具体化するに先立って 1.大学レベルの産業工芸とは 2.工芸と産業とは 3.美学と理工学とは、など基本理念にも諸論があり学科教官2～4名で幾度も口に泡をして論じ合った。このような理念解釈の論及は後年に行われる「大学の将来構想」を論じる手始めの一つだった。大学の将来構想の具現の第一歩として、専攻科がある。これは昭和58年に計画され、学内の諸条件の充足、短大教育の充実によって発足することになっていた。昭和61年末から発足に係わる態勢の整備にあたり、昭和63年度から地域産業専攻科の名で発足するに至った。この専攻科の特徴は、産業工芸と産業情報両学科の単なる補足延長の教育ではなく、学際的領域を総合的に推進、最新・精新にして実践的で地域産業をも指導・主導できる教育内容とカリキュラムで構成されている。これに並行して産業工芸学科内で将来構想の取り組みの一つとして各教官から将来“かくあるべき”“かくある希望”など多くの提議を頂いた。これらの諸論を将来構想委員会に反映した。

その後、学内の教育、研究面とも年ごとに充実されてきた。一方産業界はより世界的に、産業構造の多様化、IT産業、近代造形・芸術産業の発達を予見していた。時同じくして、国立大学の独立行政法人化への制度変化が提示されている。これらの学内外の変化を見越すよう、将来構想も従来の理念・思考を止揚する構想が実現するべく(故)蠟山、西頭両学長はじめ多くの教官の努力によって、教程にのるばかりと伺っている。

昭和60年秋に戻すと、借りている工業化学棟以外の工学部の建物、施設は全て撤去され、わずかに東側通路の“いてふ”の並木が少しずつ色づいているのが、名残となっている。このころから高岡短大として学生受入れの最初の推薦、社会人特別選抜が行われた。新入学生の募集に先立って、夏頃から7教官と学校職員と組になってそれぞれ5～7校ずつの県内高等学校の進学担当教師に、本学の特徴と卒後について縷々説明し、生徒たちには是非応募を推めさせるようお願いを歩いた。ついで、昭和61年2月に、第一期生になる一般選抜試験が行われるに至った。その冬は平年よりかなり大雪と寒さで応募者の数が気遣われたが、両学科で1250名以上を迎えることになり、予定していた県立高岡工芸高校から、志貴野中学校の教室を学力検査室に変更し、ともなってその監督教官も来年度予定教官、富山大学の関係教官の応援を仰いだ。さらに産業工芸学科の受験者に対する実技検査も急遽、取り壊し寸前の仮校舎の3階の空室で間に合うよう整え、無事検査を終えた。

多くの関係者の努力によって、わが高岡短大の学舎の過半が完成した。そこで、第一回一般選抜合格者の発表の掲示がされた。ここで、予想以上の課題が後日になって判明した。それは合格者の中から入学辞退者が続出し、定数割れの状態になることが確実になったので、大急ぎで追加募集が行われた。このことは、社会一般人、特に受験年代の生徒・学生の大学(短)観、人生観、わが高岡短大の教育理念とが理解不足だったのか、検討する必要がある。当面、学科・専攻により、辞退者数に多い少ないがあるので、一般選抜においても面接を全応募者に行うこととし、次年以降その効果があるようになった。

(追録)非常勤講師用の宿舎として、洗心苑が竣工した。(昭和63年) ついで(平成2年)この東側の三角形状でそれほど広くはない敷地に、教材として利用できる樹木園が整備された。ただ埋立土壌で、そのままでは樹木の植栽には不適で、多くの客土が必要であった。植栽樹は、“うるし”のほか、5～6種を選んだ。これに関連し、多目的グラウンド、テニスコートの周辺(北、東、南側)がある。これらにかなりの良質の客土を施し、根の深い、成長のよい樹種数種を選び、これを複層多列で、生長を予想して、間隔をとり、植栽したらと勧められる。10～15年経てば、学生諸君の成長と同様、見事な風致林になるだろう。



昔々の話



名誉教授 黒岩靖司

昭和57年(1972)であったと思いますが、暮れも押しつまった12月30日の夕方、東京芸大の恩師故小池岩太郎先生から、私が住んでいた北海道旭川の家電話が掛かって来ました。先生独特のバリトンの声で「高岡短期大学が出来ることが決定したよ。富山県に行ってくれたまえ」これが私が高岡短大を自分の問題として考えるようになった始まりです。この昭和57年という年はマイケル・ジャクソンの「スリラー」が出た年です。アメリカで。当時私は北海道東海大学芸術学部デザイン学科の教授をしていました。その前身は東海大学工芸短期大学です。短期大学と四年制の学部両方を創設から経験しました。最近この大学はオリンピックのスキー女子「モーグル」のゴールドメダリストが出た事で一般に名が知られるようになりました。

私の高岡赴任は、実際には富山でしたが昭和59年4月1日です。まだ現在の高岡短大のキャンパスは影も形もなく一面のタンポでした。休日には二上山の耳の長さが6センチの野うさぎが駆けまわる中庭もまだありませんでした。私の毎朝出掛けてゆく所は富山市五福の富山大学事務棟の4階にある高岡短大設立準備事務所でした。野球場の隣です。この昭和59年は2月冒険家植村直己がマッキンリー山に消えた年です。

初代学長の横山保先生は私より半年早く赴任されておりました。他に麻生三郎先生が既に着任されておりました。名前だけ聞かされた時私は高名な油絵の画家にあえるものと思っていましたが麻生先生は同姓同名の別人で金工の先生でした。

まもなく横山学長が「黒岩先生、高岡短大のカンバンを出すから一緒に来てください」と言われまして、富山大学事務棟の玄関に、赤茶けた桧の板であったと思いますが「高岡短期大学」と墨書した看板を掛けました。なにしろ先生は3人、学生は勿論まだいませんし場所も違いますので私は不思議な気持ちでしたが、それでも事務官の方達と精一杯パラパラと拍手したのを昨日の事の様に憶えています。カンバンは折れ釘に掛けてありますので、風が吹きますと「タカタン、タカタン」と鳴っておりました。私はこの日が高岡短大の始まりと考えていましたが、現在の開校記念日は何故か秋ですね。

高岡短期大学初代学長の横山保先生は残念ながら故人

となれましたが、私が高岡短大で出会った最も大学教授らしきのある人物でした。先生は元々経済学部の先生で数学者です。ご本人は「わしの専門は統計学だ」と言っておられました。

横山先生は一面中々のユーモリストでした。ご自分はいささかあまりそう思っていないようでしたが、こちらの出方次第では巧まざるユーモアを体全体で振りまいておられました。

先生は食通でした。お酒も好きでしたがそれよりも甘党でした。よく設立事務所の狭い学長室に呼ばれて、直径15センチ以上ある葬式饅頭をナイフで半分に分けて二人で食べました。中はあんこで一杯です。やっとたべ終わると「それでは昼めしをたべに行くか」と先生、この人はフランソワ・ラブレーの本のガルガンチュアのような人だなあと私は思いました。先生自身はローマが好きでした。古代ローマに憧れていたのだと思います。ローマ人なら先生によく似た健啖家ですし、それに高岡短大の校舎には随所にローマ風が顔を出しています。

例えば講堂の舞台の幕です。真中から左右に深紅のビロードの幕が、チージャジャーとあきます。私は金色の房だけはやめた方がよいと進言しましたが、どうやら現代のローマで観光客向けのあのようものを鑑賞したらしいのです。意志強固な先生でした。

デザインは義理と人情とやせがまん 黒岩

(主な担当科目：色彩学・環境デザイン)



仮校舎での一年間と二上キャンパス引っ越しの頃の思い出

名誉教授 澤本正巳

どこまでも碧く澄みわたった大空を見上げながら、仕合わせの気分で高岡短期大学の仮校舎である中川園町の旧富山大学工学部校舎へ第一歩を印したのは、昭和60年4月1日である。

大半の建物は取り壊されていたが、一部事務棟と工業化学科の1棟がのこっていた。工業化学科の2階の廊下を挟んで、南側に学長室や事務スタッフ部門の部屋があり、反対の北側に産業工芸学科と産業情報学科の2教官室に2・3の会議室があった。教官室といっても、教室の机と椅子をとっぱらい、そこに事務机を三つ置いたというだけのガランとした簡素な部屋だった。窓を開けると、1階の化学実験の薬品の臭気が漂ってきて、暑い日など気分が悪くなること頻りで、お世辞にもいい環境とはいえなかった。

産業情報学科の教官室には、石井栄一、木村信幸の両先生と小生が、お隣の産業工芸学科には、中川宏、麻生三郎、黒岩靖司、三船温尚の4先生が陣取り、「七人の侍」ならざる「七人の教官」が、1年後に控えた二上キャンパス開学のための準備に入るのである。

横山学長からいただいた辞令は、「文部教官教育職(一)1等級(高岡短期大学教授産業情報学科)に採用する17号俸を給する」というものだった。任命権者が文部大臣になっていたのでいささか大袈裟で奇異な感じもしたが、それだけに重責を果せられた職位であることを改めて思い知らされたような気がした。徳平副学長からは、大学設置審で、担当科目として、経営実務概論、経営管理論、労務管理論と特別演習の4科目が認可されたことを知らされた。

高岡短期大学へ赴任するまでは、行政機関(人事院)と民間企業(松下電器)に在籍し、高等教育機関での勤務経験がなかったので、なにはともあれ、1年後の授業開始に備えて教科書づくりをしなければならなかった。執筆原稿は、石井先生のお力添えで、東京の出版社から「現代経営管理読本」なる一書として刊行することができた。仮校舎時代の、小生の最大の業績といえるかもしれない。

産業情報学科には三つの専攻があり、小生は経営実務専攻を、木村先生は情報処理専攻を、そして石井先生はビジネス外語専攻を担当することとなり、各教官がそれ

ぞれの専攻の必要設備の充足や備品・図書の購入などを受け持った。小生は、いままで学問上有益な図書購入の経験をもちあわせていなかったもので、図書目録の作成や購入にはホトホト困りはてた。産業情報学科としては、和書で4600冊、洋書で1000冊所蔵する必要があった。そのうちの3分の1が経営実務専攻分であったので、非常に苦勞をして整備したという記憶がのこっている。

予算の配分と備品の購入については、吉田課長としばしば話し合ったが、なかなか意見の一致をみず、遂には口角泡をとばしてよくやりあった。返答に窮するとハスキーな声の方が更になり、処々に文部省風を吹かせて論点をぼかすという、たわいない手段を使ってでも自説を通すという人だったが、いまにして思えば、それも懐しい思い出の一つとなっている。

小さい世帯ながら、毎月1回教官会議があった。そこで昭和60年10月に推薦入学を実施することが決った。第1回の推薦入学は、高校の内申書と小論文と面接とで判定することになり、学長からは「高岡短期大学でやる気を出して真に勉強したいという人を重点的に選んでほしい」という要望があった。小論文の題名は、7名の教官から募集することになり、たしか学長と副学長が選定されたはずであるが、はからずも小生の「私の青春と高岡短期大学での夢」が選ばれた。いささかなりとも貢献でき、うれしかった。

一般選抜入試は、翌年の2月中旬に実施が決った。入試願書の受付は諸般の事情から郵便のみとした。願書受付開始前日に、競争倍率が話題になった。はじめての入試なので、誰の口からも確たる予想が聞かれない。学長が一計を案じ「予想の当たった人にはウイスキーを進呈しましょう」と提案される。小生は、高岡短期大学に対する社会一般の期待の高さと初物であることを考えて、極めて高い倍率を予想した。経営実務は8倍、情報処理は13倍、ビジネス外語は6倍とした。これが一番実際に近似した数値となり、ウイスキーをもらった。その時、学長から「なかなか勘がいいですね」と煽てられた。産業工芸学科は、黒岩先生がもられたはずである。

これは後日談になるが、洗心苑で夕食をいただいたあと、学長とよく麻雀を楽しんだ。プレーが終ったあと、「先生は勘がいいからとてもかなわないな」とよく愚痴っ

ておられた。入試の予想的中のことが頭にあったからだろう。2代目学長宮本先生の言によると、「大阪大学時代は自分が勝つまでやめない」という無邪気さがあったそうだが、小生がメンバーの時は一度もぶら下られた記憶がない。遊びだったのだから、多少は手心を加えて学長に花をもたせてあげるべきだった、お気の毒なことをしてしまったものだ、いまになって変な反省をしている。

一般選抜入試の筆記試験は、翌年2月23日(日曜日)雪の降る中、志貴野中学で行われた。競争倍率が高かったのと、はじめての入試だったので、歩留りがよめず、合格者の中の多くが他大学へ流れ、結果として産業情報学科は、2次試験をやらざるを得ない破目に落ち入ったのである。

うらかな小春日和の曇りがり、めずらしく学長がわが研究室にこられ、3人の教官を前に、しばらくは例によってたわいない四方山話、次いで、第1回入学生の受け入れのこと、産業情報学科の教官の増員のこと、二上キャンパスの建築設計のこと(学長は、イタリアにある古代建築様式を模して設計された正面玄関に多くの柱のあるユニークな外観には大変ご満悦だった)についての話があり、最後に「この3人の中で、誰か産業情報学科長になってほしい。ところで澤本先生はどうですか」と切り出された。小生は、「行政や経営の実務経験が少なく、教育・研究の分野では素人ですから勘弁願いたい」と申しあげた。

学長が退室された後、石井先生から「私は永年文部省調査官をやってきたので文部省のことは隅々まで知悉している。文部省関連の情報はすべて流すから、大船に乗った気持ちで学科長をやればよい。学科長は、年齢の高いものからやるのが順序で、次は必ず私が引き受けるから」との有難いご託宣があり、つづいて木村先生から「教育・研究のことについて判らないことがあれば、私が神戸商科大学にいた経験から、なんでも教えるし援助するから」という話があり、両先生の助けを得て初代学科長をやらざるを得ないか、という心境に傾いていった。

それから1ヵ月ぐら経って、学長から「文部省に学科長手当の支給を要求してきたが駄目だった。申し訳ない」というお話。この話を聞くまで、学科長の職務の重さをあれこれ考え気掛りで仕方がなかった。学長から「手当は支給しない」という話を聞いてから、緊張感がスーッと抜けて気持ちが楽になった。「手当までもらってあんなヘマをやっている」と非難されるよりは、「手当ももらっていないのにまあよくやっているじゃないか」といわれる方が楽だったからである。その意味で「手当なし」は小生にとっては大変有難いことだった。

ちょっと余談になるが、学長のような大先生から、小生のような存在の軽い人間に、澤本君ではなく澤本先生と呼ばれるのは、いささか面映ゆかった。先生と呼ばれるのは、相手への単なる思いやりではなく、いまは半人前かもしれないが、民間企業の実務経験者第1号として任用したのだから、早く一人前になってほしいとの期待を込めて、先生と呼称されているのかも知れないと思ってみた。そう思うと、素直な心でいろいろなことを学ばなければいけないという自分自身に対する自戒の材料にもなった。

昭和61年3月になって、二上キャンパス新校舎への引っ越しがはじまった。仮校舎では、いささか不便な思いをしてきたせいもあり、新校舎はモダンで設備も万事宜行き届いており、思わず「歓喜の歌」を口ずさむくらいだった。図書館も体育館もなかったが、現にある講義演習棟・研究棟で十分だった。そして、光明と生新の気配が、その間を領していた。

新校舎へ移ってから、学長室へ足繁くかよった。学科長としての職責を果たすため、わからないことは教えを請い、右にすべきか左にすべきか判断に迷った時は相談にのってもらった。いつも嫌な顔一つみせず、こちらが得心するまで対応してもらった。学長とのやりとりの中で、広く大学運営のことや学問上の抱負経緯について話してもらったことも有意義だった。その中から、いまもなお胸底深く刻みこまれていることを紹介しよう。



・横山学長、石井先生と澤本；於氷見の旅館(昭和61年5月)

一 教官資格のこと

「大学における教授は、博士の学位をもっているのが一般ですよ」という話。企業にいたときは、学問上の研究や博士などとは縁なき衆生であった。中央研究所には、それこそ掃いて捨てるほど博士がいた。彼等には、みんなの稼ぎを食って悠然と仕事をしていると、半ば蔑み半ば羨やむ目でみていた。

学長の話聞き、当時の大学・短期大学の設置基準を調べてみたところ、教官資格の第1項に「教授となることのできるのは、博士の学位を有し、研究上の業績を有

する者」とあった。ここで大学・短期大学における教授の資格と博士の重みを認識したのである。



・第1回卒業生と澤本；於高岡短大講堂(昭和63年3月)

一 研究紀要のこと

「研究は質の高いものでなくてはならない」というのが学長の口癖であった。高岡短期大学で、研究紀要の発行が話題になった頃、Osaka Economic Paper に載った学長の論文が、ノーベル経済科学賞を受賞したH. S. Simon の論文に引用されたことを例にあげ、研究内容が質の高いものであれば国内外の学者が引用するし、引用文献数が多いほど当該論文は高い評価をうけるものだ、ということを力説された。

そして「質的に低次元で、他の研究者から無視されるような論文しか出せないのなら、研究紀要は発刊しない方がましだ」という、学長の固い信念に、小生などはい

ささか後退りぎみに、恐縮してお説を拝聴したものである。

一 組織活性化のこと

第1期生が入学し、万事順調に滑り出し、関係者一同安堵の胸を撫でおろしていた、その時期、学長は「全教官が希望をもって活躍できるようにするため、組織活性化が必要である。については、短大修学2年の上に、専攻科設置の構想をいまから検討しておくべきである」と。いま目の前にある問題の処理と同時平行的に、将来にわたる問題を展望し検討しておく必要があるというのである。この話を聞いて「治にいて乱を忘れず」に優るとも劣らない発想だと思った。前景と遠景のバランスをとって対応するという、その感性のよさにおおいに啓発させられた。

高岡短期大学を定年で辞めてより、相当の歳月が過ぎたが、来し方を振り返れば、心豊かに勤めさせてもらったこともあり、思い出が多い。在籍中は、徳平副学長・島田副学長・戸田副学長をはじめ多くの教官、事務スタッフの方々にご指導とご助力をいただいた。特に、横山学長には、実に多くのことについてご教示いただいた。学長からいただいた薫陶の大なるに較べ、お報いできたことの小さなを思うと呵責が募るばかりである。横山先生が鬼籍入りされてより久しいが、改めてご冥福をお祈りする次第である。

高岡短期大学の思い出

横山初代学長のお声がかかりで、まだ建物もない、学生もいない高岡短期大学に赴任して、16年間勤務させていただきました。ほとんどゼロから新しい大学を作り上げるチームの一員に加わるという貴重な体験が最大の思い出です。私生活では家内と子ども富山の自然と人情が気に入って、富山に自宅を建てるという、人生の大きな節目を経験できたことも、横山先生が富山に連れてきて下さったことの大きな果実として今も感謝しています。

16年間の思い出も、数え始めるときりがないので、最大のものとして1つに絞るとすれば、16年のうち15年に及んだ「民間企業等との共同研究」になります。じつは私は、東京時代、神戸時代を通じて、企業内研修の講師、

コンサルタントのまねごと、学会や協会での産学共同研究など、幅広く企業との付き合いを続けていました。これは、古いタイプの教官や事務官から見ると、“国家(地方)公務員でありながら教育・研究への専念義務をなおざりにして小遣いかせぎをしている、ケシカラン”と非難の対象になりますし、当時盛んだった学生運動の活動家から見ると“国立大学の教官が、独占資本主義の権化である大企業の手助けをしている、ケシカラン”ということになります。

中曽根内閣のころから、国立大学にも「民間活力導入」が叫ばれるようになり、文部省の空気も変わってきたようです。高岡短期大学では、“地域社会に開かれた大学”



名誉教授 木村幸信

をモットーにして大学開放センターを設置し、その事業として①社会人対象の公開講座、②企業等との共同研究、③作品の展示、④コンサルテーションの4本柱を掲げることができました。私は、この①、②、④を、こんどは胸を張って(大学の正規の職務として)やれる、というのが、とても嬉しいことでした。もともと横山先生の最初のお誘いの言葉でも、大学開放事業の重要性を強調されていて、それに対する期待から、よく知らない北陸の地に赴任する決意を固めた、という背景もありました。

期待は裏切られませんでした。授業の準備と公開講座とが重なったりして忙しさをボヤいたこともありました。大いにやりがいを感じることもできました。

さて、企業等との共同研究ですが、三協アルミと15年間、タカギセイコーと2年間、竹中製作所と2年間ですが、やはり最大の成果は三協アルミとの共同研究です。

私は、神戸時代に、横山先生が副会長をされていた「関西経営システム協会」という産学協同組織の研究活動の一環として「IE 応用研究会」を立ち上げ、京阪神から滋賀や和歌山などに立地する有名製造企業の生産管理担当者の方々との実践的な研究を続けていました。当時有名になった「トヨタ生産方式」の向うを張るまではいきませんでした。いくつかの企業で効果を出すことになる「ストックレス生産」という概念をまとめ上げ、研究会発足から8年かけて同名の著書を出版できました(福田龍二、木村幸信(監修)『ストックレス生産』、日刊工業新聞社(1986))。

これをテキストとして、三協アルミの生産管理部、および関連部署の方々をメンバーとする研究会がスタートしたのです。

原則として週1回、三協アルミのメンバーが高岡短大に来られて、問題の検討、私の解説、方式の提案、効果の確認など、山のようなデータを持ち寄って会議形式で行なっていましたが、「実践」を重んじる「ストックレス生産」ということもあり、私も製造現場を見るのは大好きなので、ときどきは研究会の場を学外に移し、三協アルミのいくつかの工場や、多数ある協力工場などを視察しました。気分転換というわけではないのですが、もっと遠出をして、堺市のダイキン工業や柏崎の新潟 NEC など、すぐれた方式を編み出し成果を上げている会社を一同で見学したこともあります。

三協アルミとの共同研究での最大の成果は、案外早い時期に現われました。本社から工場への生産指示の方式を工夫するだけで、なんと50億円の仕掛り在庫削減効果が出たのです。これは、立ち会った私の手柄というよりも、①私の基本的アイデアを実践的な工場管理システム

に育て上げた三協アルミのメンバーの努力、②それ以前に進行していた営業情報管理の全国ネットワーク、本社のコンピュータと各工場のコンピュータとのオンラインシステムなどの整備が相まって、最新データでシステムを機能させたこと、③素材であるアルミ地金の単価が高く、それを使った仕掛品や製品の在庫が高価になり、在庫削減の経済効果が大きくなること、などが大きな要因です。

長く共同研究を続けて、気のおけない仲になったころ、“あなたがたの以前の生産管理方式がおソマツだったからこそ、単純な方法で大きな効果が出たんですよ。これが最大の要因です。”とイヤミを言ったこともあります。欠品(品切れ)を起こして営業部門から叱られるのがイヤで、作れるときには作れるだけ作っておこうという大ロット主義を、必要なものを、必要なときに、必要なだけ作る、という小ロット主義に切り換えたのが最大の要因です。「在庫半減、50億円浮く」という見出しで北日本新聞にも大きく掲載していただき、高岡短大の共同研究をPR することができました。その後、こうした方式を上流工程にも適用するという関係者の大変なご苦労があり、公称80億円としています(拙稿「三協アルミ「ストックレス生産」で80億円の在庫低減」、『戦略的統合生産システム：SIGMA』、日刊工業新聞社(1993)、pp. 99~100)。

この共同研究は、企業の経営情報システムを工夫・改良することで、コンピュータを使うという理由で共同研究のハシクレとして認められたのではないかと思います。というのは、今日に至っても、国立大学の共同研究のほとんどは発明・発見、試験・試作といったハード面の研究で、もっぱら工学部の教官が担当しています。私も、三協アルミの総務部長から、“ハードの委託研究なら、もっと研究費が出せるんですがねえ”と言われたことがあります。まだまだ日本では、マーケティングや人事管理、財務管理などソフト面では、産学共同研究をやろうという動きが乏しいようです。高岡短大では、私以外にもデザインや住宅建築など、ソフト面に近い共同研究が行なわれましたが、全国に有名な経営学部、商学部、経済学部がいっぱいあるのに、そういう文科系での共同研究は見たことがありません。

企業にとっては専門研究者の助言を(安く)得られるチャンスですし、研究者にとっては現実の生きた企業の問題にタッチできる貴重なチャンスになりますから、もっともっと文系の共同研究が盛んになればと思います。

この20年

産業造形学科教授 三船温尚

学生受け入れ前年の昭和60年4月に着任し、移転期の富山大学工学部(現在の高岡高校の敷地)にあった準備室で1年を過ごした。平成17年3月でちょうど20年が過ぎた。高岡短期大学教員のなかでは最も在籍年数が長くなった。これまでの想い出深いでき事をたどってみた。

■準備室と事務員の想い出

ある意味で、私は幸運だった。準備室の業務を事務員と一緒に経験できたからだ。もしあの時、苦労を共にしていなければ、大学運営や事務に対する考えは今と違っていただろう。当時、事務員が10数名ほどで、教員が7名。29歳の私が教員のなかで最年少。若いだけに(良くも悪くも)かわいがられた。研究生から準備室に入った私は、使いモノにならなかった。少し役に立つようになったのは、工学部の移転が終了し、準備室の1棟だけをポツリと残した更地に秋風が吹き始める頃からだ。それまで、事務の人たちは辛抱強く、半人前の私の面倒をみてくれた。よくお酒にも誘ってくれた。事務員はみな多忙で、朝から深夜までよく働いた。今思えば、あの頃、忙しい中で準備室の事務員と飲んだお酒が、これまでで最も楽しかったように思う。しかし、酔うと、使いモノにならない私への本音の批判も聞えてくる。使いモノにならない私も、酔って本音で言い返した。

少し働けるようになった私は、夜遅くまで残って仕事をするようになった。すると、私が帰る夜10、11時になっても、どの事務員もバリバリ仕事をしている。遅い日は深夜1、2時ころまで働いているようだった。しかし、翌朝は、いつもどおり机に向かっている。工学部跡地の準備室では、このような事務員の仕事振りが何ヶ月も続いた。全くのゼロから大学を作るといことがどれだけ大変な仕事であるのかを、昭和60年度の1年間が私に教えてくれた。

やはり第1期生の入学試験は大きな難関だった。一般入試の学力試験は、志貴野中学校校舎を借りておこなった。少ない人員で乗り切るには事務部はさぞ大変な思いをしたのだろうが、私にはその記憶がない。私に与えられた仕事は、本部から一番遠い教室の担当で、答案を回収して本部に全力疾走で戻り、直ぐに次の試験問題を

持ってまた全力疾走するという役目だった。私にはそんなことしかできなかった。応援の他大学の若い方が私の相棒で、冬の静かな志貴野中学校の廊下を無心で二人走った光景は今も忘れない。

雪がやや穏やかになった昭和61年3月ころ、それまで私を本音で厳しく批判、指導してくれた会計課長が、「もし、あなたの欲しいものがあたらオレに言ってくれ。なんでも買うから」と酔って私に言った。突然で、その真意がすぐには分からなかった。酔うとよく言い争った厳しい課長が、新米の私のそれまでの仕事を認め信用してくれたのだと分かり嬉しかった。その時、何も買わなかったが、そんなことはどうでもよかった。

教員と事務員が信頼、協力し同じ目的に向かって大学運営に関わることが理想である。学生受け入れ準備のために目的の一つにして事務員と過ごした昭和60年度の日々は、私にとって貴重な経験と楽しい想い出になっている。

■学生と授業準備のこと

学生受け入れ直後の授業準備は、大変で果てしなく続くように思えた。金属工芸の実習に必要な道具には、市販されていないものも沢山あった。材料を購入し、学生人数分を作ることもあった。その日の授業を終えて次の授業の道具を夜遅くまで残って作らなければならない。ついには学生も見かねて、手伝ってくれる。あの時、私を助けてくれた1期生には、本当に今も感謝している。想い返せば、教員も学生もすべてに一生懸命で、お互いが高岡短期大学を創って行くという使命のようなものを背負っていた時代だった。

■研究と今後の展開

昭和60年から5年間ほど、私は研究をした記憶がない。その後、授業準備の雑務が落ち着いた頃、さて鑄金作品を制作しようと思っても、体も頭も動かない。ものづくりの感性は死んでいた。リハビリのような作品制作が始まり、まるで初心者に戻ったようだった。

そのころ、制作と並行して、「古代鑄造技法」の研究を始めた。それまでの反動もあって、一気に調査に出かけるようになった。国内から中国、韓国へと調査が広がり、今では研究を通して国内外に多くの友人ができた。

三千年前の青銅器を数多く手に取って間近に見ると、知らず知らずのうちに狭いものづくりの「常識」に自分自身が縛られていたことに気づく。一方では、卒業した学生が地場産業のいろいろな組織や研究会の委員長を務めるようになり、彼らを通じて銅器業界と大学との共同研究会を行うようになった。13年前に開始した古代技法研究が、こういった共同研究のテーマへ展開し、地場の銅器産業の商品開発や技術開発へと広がりは始めている。

私自身の20年間を振り返ると、新鮮な授業をおこなうことや、柔軟な発想で業界と共同研究をおこなうために

は、不断の研究努力が必要だと痛感する。身を持って「常識を疑い新しい価値を探る」姿勢を学生に示すことができるよう日々を努力しなければと、あらためて肝に銘じている。



本学の校章はかたかごの花

昭和60年に第1期生を受け入れて間もないころの本学は、中庭の石張り作業の槌の音や、グラウンドの整地作業を進める重機のエンジン音などが、授業の合間も聞こえてくるような状態でした。その初年度の夏、本学の学生が総合体育大会へ参加することが決まり、開会式の入場行進の際に校旗が必要になりました。当時産業デザインコースの教授であった小関利紀也先生(本学名誉教授)が、かたかごの花をモチーフに校旗を作成され、それに間に合わせる事ができたのです。翌年、故横山初代学長のご意向で校章と校旗を同時に作る事になり、同じモチーフで校章マークを再デザインする事になりました。

かたかごの花は冷涼な気候を好む寒冷地向きの花で、春の雪解けと共に花を咲かせ、うつむき加減でひっそりと咲く可憐な姿の花です。越中国司であった大伴家持が伏木に滞在していたころ、現在の高岡市二上山に咲くこの花を詠んだといわれています。

それは、「もののふの^{やそおとめ}八十娘子らが^く汲みまごふ^{てらい}寺井の上のかたかごの花」という歌で「大勢の若い娘たちがやってきて、わいわいにぎやかに水を汲んでいる。その井戸のそばで咲くかたかごの花の美しいことよ」というものです。かたかごの花は、数ある万葉集の中で、この一首の中にしか登場しない花です(万葉集巻18 4143)。

小関先生はこの歌を、「本学に大勢の若い学生たちがやってきて、わいわいと元気で学問に励んでいる。その大学の周辺で美しく咲くかたかごの花」と新大学に寄せる思いをこの歌に重ね合わせて、この花をモチーフに選

産業造形学科教授 小松研治

ばれたのではないのでしょうか。

私は、その意を受け継いで、二上山に群生するかたかごの花を撮影に出かけ、またこの花に関する資料を集めてスケッチをはじめました。3つの花卉をデザイン・工芸・情報の融合を願って描きましたが、Takaoka National Collegeの頭文字TNCを入れてほしいという学長のご意向を受けて変更を重ね、現在の紫色の形になったのです。



以来、この校章は本学の配布する多くの印刷物に、そして正面玄関のフラッグポールにたなびいて、20年間の役目をひとまず終えようとしています。かたかごの花に込めた思いのとおり、この校章はその間に卒業して行った学生たちのそばでひっそりと本学を象徴して、彩を添えていたように思っています。

ゼロからのスタート



元保健体育助手 加藤敏弘

昭和61年、高岡短期大学が第1期生を迎える直前の3月末、私は高岡市内でレンタルのトラックを借りて、それまで住み慣れた筑波の地を往復し、一人で引越しをした。設立当初は現在の約半数のベテラン教職員が勤務していたが、私は24歳という若さで尾崎秀男教授の元、保健体育科目の助手として赴任した。初めての社会人である。

当時はまだ体育館もグラウンドも出来ていなかった。それでも第1期生200余名の保健体育の授業を毎週実施した。二上青少年の家の体育館や隣接施設の駐車場、正面玄関脇の空きスペースなどを活用し、「本物を楽しく」味わうことができる体育を目指して、毎日尾崎教授とアイデアを出し合いながら、授業準備に奔走した。関東育ちの私にとって、北陸の天気は想像を超えていた。何しろ一日のうちに、晴れ、雨、みぞれ、吹雪と急激に変化するのである。徒歩での近隣施設への移動を余儀なくされていた私たちは、天候の激変で、何度も大変な目に遭遇した。こうした体験から1コマの授業を計画する際に、少なくとも3つの授業展開を準備しておくことが当たり前になっていた。

尾崎教授と2人で目指していた体育は、「やらされる体育」ではなく「自ら進んで活動する体育」である。尾崎教授も私も、学生たちができるだけ自然に思わず身体を動かしたくなるような雰囲気づくりにつとめた。二上山へ登る際にも、単1電池が10個ほど入るような大きなラジカセを担ぎながら、授業の度に往復した。軽快な音楽をかけ、いつも笑顔を決やさず、学生たちに声をかけ続けた。そして、二上山の体育館では学生たちが自発的に活動し始めるのを待った。当時は社会人入学が高岡短期大学の目玉となっており、1期生の中には私より年輩の方が多数高卒の若い学生と一緒に受講していた。若い学生は、おしゃべりに熱中していて、なかなか活動が始まらない。そんな学生たちを前に、私たちが何も指示をしないことに対して、社会人学生の一人が苛立ちながら「先生っちゃ、いったい何をしとるんかね？」と私に聞いてきた。体育の先生が指示を出すのが当たり前だと言わんばかりであったが、彼の中では若い学生たちとの距離感を多少感じ始めていた頃であったかも知れない。そんな時、尾崎教授は「いいところに気がついた

ねえ。先生っちゃ、何をするのかねえ。学生っちゃ、何をするのかねえ」と逆に問い直した。多少、戸惑っていた私は、「さすが！」と思った。彼は、その時から何かが剥がれ落ちたように若い学生たちと同じ目線で活動し始め、他の学生から頼られる存在となった。この時の体験は、今でも学生との対応の基礎となっている。

こうした授業展開の成果か、保健体育科目は学生生活に欠くことのできないものへと成長した。高岡市民体育大会への参加を契機に多くの運動部が発足し、あらゆる種目の学生たちをあっちこちの大会へ引率した。小さな大学ではあるが、学生たちは小さく縮こまらずに伸び伸びと活動した。こうした勢いが、勉学やものづくりに大きな影響を与え続けたと自負している。1年間の体育授業が終わる時に、尾崎教授のお話を聴きながら、多くの学生が目に涙を浮かべていたことは、週に1度だけの授業であっても、学生たちの心に響く何かを伝えることができることを物語っている。

今日の大学では当たり前になっているが、前述した社会人入学や公開講座、産学官共同事業、地域との連携など、高岡短期大学は精力的に取り組んできた。それだけに新しいものを生み出すエネルギーは膨大なものである。本当に真夜中まで事務職員の方と半ば喧嘩腰で議論を重ねたこともあった。半人前の私は、こうした経験を積み重ね、大学の仕組みや大学運営の難しさを学んだ。4年間という短い期間ではあったが、高岡短期大学での経験が現在、国立大学法人となった茨城大学での勤務を支えてくれている。その高岡短期大学が富山大学、富山医科薬科大学との統合を目前にして、特色GP・現代GPを獲得したことは、本当に私に勇気を与えてくれている。ゼロからのスタートであっても、日々のコツコツとした積み重ねが力を発揮する。高岡短期大学という名前が消えても、私を含め卒業生全員の身体の中には、永遠にその活動エネルギーが蓄えられている。いかなる苦境に立たされようとも、高岡短期大学での笑顔を忘れずに活動していきたい。本当にありがとうございました。

草創の頃

地域ビジネス学科教授 磯部祐子

開学間もない教室には、真新しい机が整然と並べられ、進取の気象あふれる学生の笑顔があった。しかし、何かしら物寂しさを覆うことができなかつた。図書館も不整備で、学生も教員もある種の欠乏感を抱いていたに違いない。風が運ぶ製紙工場の悪臭が、満たされぬ心に追い討ちをかけるように鼻を突いてくることもあった。

やがて、一年が経ち、少しずつ図書も整ってきた。なかでも、高岡短期大学協力会によって購入された「志村文庫」は、中国語学・中国文学の両面にわたって学生の自習や卒業論文の執筆に便宜を運んでくれた。教員も、合わせるべき照準が定まり、卒業時のレベル設定も現実を反映したものとなっていった。

少しでも中国を理解してほしいという教員側の希望は、夏休みの全員合宿や松村記念館の見学、卒業論文の製本化を提案することになった。爾来、合宿は数年経って中止になったものの、卒業論文集の製本は、今年まで綿々と続いている。合宿時の緑なす医王山の空気はどこまでも清らかだった。遠浅の千里浜で見た夕日の美しさも忘れられない。

時あたかも、中国の改革開放が勢いを見せ始め、中国語の訓練を受けた人の必要性が叫ばれ始めたころである。語学習得をめざし、初年度から数人の学生が中国留学を希望してきた。まだ一般的ではない休学留学の道をなんとか切り開こうと学長と折衝を重ねたこともあった。甲斐あってか、留学も叶い、今日、中国圏で活躍している人も生まれた。

しかし、辛い思い出もある。それは、2期生数人が遭遇した交通事故である。幸い、植物人間を宣告された学生も、ご家族の手厚い看護の下で奇跡的に生還し、社会復帰を果たすまでになったが、あの時、学生も教員もあまりのことに茫然自失し、如何にすべきかその言葉を失ったのだった。

時が経つのは速い。草創の頃、私自身とはといえば、学ぶことの意味と喜びを少し分かった頃でもあった。それゆえにこそ、学生には「学びて時にこれを習う、亦悦ばしからずや」の思いを自分のものにしてほしいと願った。知命も遠くない今、「楽しみて以って憂いを忘る」境地を共に持ちたいと心から願う。

卒業生の回想



「随想」
記念誌発刊によせて

情報処理専攻 昭和63年卒業
高岡短大同窓会長 寺口克己

私にとって高岡短期大学への入学は、人生の転機であったように思う。

その頃は、職場では主任という立場にあって一人身でもあったせいか、柄にも無く勉学に対するモチベーションが高かった時期でもあった。

そんな折、上司から社会人入学を勧められたときは、まさに晴天の霹靂というものであったが、職域とは別の分野の知識を得たいという思いから、二つ返事で受験を

希望した。

それから、二年という期間ではあったが、高岡短期大学の創設期にあって、少なからず学生自治活動に係わった者の一人として印象深い出来事をお話したいと思う。

ただ、二十年前のこととなると、幾分記憶が曖昧なところもあり、正確を欠くことがあることをお許し願いたい。

マスコミ報道

社会人入試の合格が発表された頃は、新設大学に対する報道が盛んに行われたこともあって、個人的にも何かと取材を受けることがあった。

当時としては、社会人入学を始めとする地域産業との結びつきを特色とした設置構想は、凄く斬新なものだったように思う。

ゆえに、地元のマスコミ報道は結構な力の入れようであった。

あるテレビ局は、特別番組を企画するような状況で、私のような数人の社会人入学生などは丁度よいターゲットとなったようで、案の定、取材の申し込みがあった。

職場での勤務の様子やインタビューなどのビデオ撮り際には、周りの人達も巻き込んでのことであったから、忙しいなか職場の仲間には迷惑をかけたなと思う。

入学式

入学式が終了して食堂で周りの人達と雑談していた時のことである。

社会人入学の私は、現役生の中に混じって九歳も違う歳の差をどうしようかと、周りの様子を伺っていた。

その気持ちを察してか、私よりは年代が上であると見受けられる方が語りかけるように話しかけてきた。

相手は私に対して敬語を使って話されるが、私は先生だと思い込んで恐縮しながら話を続け、お互いに名刺交換をした時だった。その時、初めて学生同氏であることが分かり、互いに顔を見合わせ大笑いした。

言うなれば、地域に開かれた高岡短期大学ならではの微笑ましい一場面であったのかもしれない。

その方は、井波でも有望な木彫作家であったことを後で知ったが、その時、戴いた名刺の表は、台紙に檜を薄く張り合わせたものだったことから、職人のこだわりを伺い知ることができた。

創己祭

大学生活にも幾分慣れた頃に、有志が中心となって大学祭実行委員会が活動を開始した。当初は、産業工芸学科の生徒が中心だったと記憶している。

その中に、「ガンちゃん」というニックネームで、当時のアニメ「アラレちゃん」風のメガネをかけたしっかり者の女性がいた。その時の実行委員会は、彼女がなにからなにまで取り仕切っていたが、なにせ初めての大学祭の準備ということで、ノウハウも無く実際は收拾が付かず大変苦労している状態であった。産業情報学科からも委員を出して盛り上げていこうということになり、私も十人ほどの友人と共に委員として活動させてもらうことになった。

準備期間中は、それはもう大変な作業の連続であった。パンフレット作成、広告の勧誘、ポスター作成、模擬店の配置、公演のタイムスケジュールなど等、企画・挫折・復活・達成が繰り返される中で、どうにか開催まで漕ぎ着けたような状況であった。

その中で、私が感じたことは、このようなイベントを

開催するときの高岡短期大学特有の強みである。それは、産業情報学科と産業工芸学科という異種の学科が、それぞれの特性を生かした仕事を専門的にこなしてくれるということだった。文章のワープロ打ち、予算関係などの事務処理は産業情報学科を中心に、そして、ポスター図案、看板作成などの物作りは産業工芸学科というふうに分業して行ってもらった。

彼らは持ち味を遺憾なく発揮して企画担当の発案を自在に仕上げてくれたのだった。

総合大学以外で、このように大学祭を運営できる大学は日本広しと云えども、この高岡短期大学ぐらいではないかと思う。

ここで、当時の苦労話をひとつ紹介しましょう。

パンフレット広告の勧誘に動こうとしたときのことである。とにかく、高校出たての若者が見ず知らずの企業やお店の方を相手に広告料をいただいてこなくてはならない、そのためには、しっかりした接遇態度を見に付けさせることが重要であると考えた私は一計を案じた。それは、勧誘活動を希望する人たちに練習を積んでもらい、最終審査として私の模擬面接に合格したものだけが、晴れて勧誘活動を行うというものであった。

この目的は、勧誘で印象を損なって高岡短期大学のイメージをダウンすることを避けたいのは勿論であったが、真の狙いは、彼らに高岡短期大学の名を背負わせることで自覚と責任の意識付けをしてもらい、ひいては、高岡短期大学のイメージアップを図ろうとする一石二鳥の策のつもりであった。その甲斐あって、予想を上回る成果であった。今改めて、彼らの頑張りに敬意を表したいと思う。

話をガンちゃんに戻すとするが、ガンちゃんは、今でもテレビで人気の笑福亭鶴瓶の大ファンで、是が非でも創己祭に呼ぶのだという強い思いと憧れを持っていた。

その願いが叶って、憧れの鶴瓶と握手できたときは、人目も気にせずうれし泣きしていたのを思い出す。彼女の姿を見て、それまでの苦労が二上山の彼方に消し飛んでしまったと感じたのは、私だけではなかっただろう。



同窓会記念植樹 平成元年11月

経営学

専攻は情報処理を学んだが、ご教授いただいた先生方には感謝の一言に尽きる。

その中でも経営学の授業は、消防という組織的運用を重視する職場で働いていた私にとって、自分にとって必要な多くの事を学ぶきっかけを与えてくれた。

その頃の風刺漫画に「がんばれタブチ君」いう4コマ漫画があった。

プロ野球選手の田淵幸一氏のキャラクターを面白く脚色したものであったが、これを教材にして日本人の思考・心理を講義された先生がおられた。

日本人の「新入り」観と「よそ者」観に関するものであったが、大変、面白い授業の流れで本質を理路整然と説明して下さったことに感銘を受けたのであった。

これを機会に、組織管理(マネジメント)に関する本をよく読むようになり、職場に戻っても自分流ではあるが管理意識を保てるようになった。

私の脳裏に一石を投じてくださった先生方と「がんばれタブチ君」に、そして何よりも高岡短期大学で学ぶ機会を与えてくださった方々に心から感謝を申し上げたいと思う。

ここまでお話した他にも「創己」の由来、同窓会設立の逸話など、まだまだ本学の創設期ならではの思い出があります。

しかしながら、このあたりで筆を置かせていただきました

と思います。

高岡短期大学という名は数年後には消えてしまいますが、これも時勢と割り切り、富山大学芸術文化学部として再生するキャンパスの発展を心よりお祈りしたいと思います。

略歴 昭和33年5月14日生まれ 昭和63年3月 産業情報学科情報処理専攻卒業 **勤務先** 高岡市消防本部消防司令・通信指令課第一主幹 **高岡短期大学同窓会長**(昭和63年1月の設立時より、今日まで会長の任にあたる)

回想

ビジネス外語専攻(英米コース) 昭和63年卒業
中村里恵子(旧姓 朝倉)

国立高岡短期大学、設立22周年おめでとうございます。

現在、私は英語にかなり深く関わる仕事をしています。今まで自分の歩んできた時間を改めて振り返り、現在の私がある基盤は高岡短大への入学から始まり、そして在学中に培われたものだ、と思いを廻らしております。

中学、高校と英語が大好きであった私は、何の迷いもなく「ビジネス外語英米コース」を選択しました。大学での勉学はそれまで学んできたものとは全く違い、専攻

名が語るように、本格的な実務英語を学びました。だからこそ英語への興味はつきることはなく、卒業のための研究論文は英語で書くことに決め、担当教官の先生には実に丁寧にご指導いただきました。振り返ってみて何をどう書いたのかは全く思い出せませんが、「書いた」という実感と達成感は今でも残っています。

卒業後、英語をさらに学びたいと思い、急遽、アメリカ留学を決定しました。4月も中旬を過ぎ、同級生は新たに社会人への道を歩み始めた頃に、私は全くの暗中模索、不安定な状態でした。そんな時、短大の恩師から「いろんな留学斡旋業者があるけれど、本当に行きたいのなら学校との各手続き、渡米準備など全部自分で手配なさい。それくらいできないのなら留学しても向こうで何もできない」と静かに、しかしきっぱりと言われました。その言葉で心が定まったのか、私はどこにも頼ることなく一人で手配、準備、渡米し、そして無事4年後大学を卒業して帰国に至り、現在の私があるのです。今も恩師のあの時の言葉を思い出し、何事においても通ずるものであると確信し、変わらず自分を叱咤激励する言葉となっています。

さらに、私は1期生で大学に入学するというとても貴重な体験をさせていただきました。完全とはいえない状態でスタートし、それこそ自分達が学校を作り上げるという何事にも変えがたい経験を得ることができました。高岡短期大学は、私の人生を決定する素晴らしい先生方、友人に出会うことができた場所です。これから高岡短期大学は新たなスタートを切ることとなるわけですが、高岡、富山を代表する学府として、今あるすばらしい学風、環境をこれこれからも絶やさず、後世へと受け継いでほしいと願っております。

略歴 昭和63年 国立高岡短期大学産業情報学科ビジネス外語英米コース卒業 平成5年 トロイ州立大学 国際関係学部経済学集中コース卒業 13年 富山大学大学院 経済学研究科(環境経済学専攻)卒業 在学中 Phi Alpha Theta (Honors of Society of Economics、経済分野の成績優秀者)に所属

現況 帰国後、一般企業で、貿易事務や、通訳・翻訳業務に携わった後、「財いしかわ国際協力研究機構」にて、国連大学から派遣された所長の下、秘書業務、会議通訳、社内用・対外用文書の翻訳、管理業務アシスタントに携わる。富山に引越し後、「財環日本海環境協力センター」にて、翻訳業務、特にUNEP 地域海プログラムの1つであるNOWPAP 関係の英文資料の翻訳に従事。その他、フリーランスで通訳、翻訳業務に数多く携わる。一方、雑誌記事のため取材、編集業務も行う。

酒とスルメとポップコーン

金属工芸専攻 昭和63年卒業
藪 元昭

それは毎度の光景である。夕暮れ時、鑄造室の土間には、砂ボコリと煙、そしてスルメとポップコーンの匂いがする。みんなの鑄型に湯を流し終え、鑄造のあとかたづけもまだ済まないうちから火を落とした炉の上には、きまってスルメとポップコーンが乗っかっている。

「ボン酒もってきてよ。」

「湯のみいくついるーう。」

「スルメひっくりかえしてよ。」

「みんなもうはいったあー。」

「じゃあ乾杯あーい。おっかれさあーん。」

「ねえ、みんなのがうまいこと流れたかねー。」

「いやー、シャボのがちょっとふいとったね。」

「なあーん流れとらんかもしれんわ。」

「でも出してみなんわからんけど。」

「そういやおまえきのう何しとったがよ。」

「おわバイト終わってから風呂行って、その後飲んどったが。」

「一人でか？また土曜日でも行くから飲もまいけ。そっで豪華三本立てでも見てくっか。」

「でもどうなったがよ、〇〇ちゃんと。誘ったがだよ。」

「なーん、もういいが。」

「なんでよ、けっこういい感じやったのか。おれらも協力すっぜ。」

「なーん、もういいちゃ。」

そんな他愛ない会話が鑄造の後、教官も生徒も酒を手に、空がすっかり暗くなるまで続くのである。

酒とスルメとポップコーン

それは毎度の光景である。



金工展 金工のみんなと

略歴 昭和43年1月10日 高岡市生まれ 63年 金属工芸専攻卒業
平成5年～現在に至る ヤブ原型所設立(銅像、モニュメントの原型を製造しています。平成4年に漆工芸専攻(第1期)塩田雅子と結婚。平成7年3月現在、小6、小1の男の子と女の子がいます)

「高短」の思い出

経営実務専攻 昭和63年卒業
北川真里子(旧姓 福光)

高岡短期大学、第一回卒業生として、今回このような記念誌の発刊にあたり、お手伝いさせて頂けることを大変うれしく思っております。

入学した当初は、真新しい校舎で学べる喜びと、すべてのことが初めてのことで不安な気持ちも少なからずあったような気がします。

私が、在学しておりました産業情報学科では、先生方が、新しい試みだったと思うのですが、企業で活躍されていた方等、幅広い分野から採用されて、教鞭を執られていたので専門知識を身につけて、社会に貢献したいと思っていた私にとっては、とても充実した講義内容であったと思っております。

ただ、私達一期生にとっては、いろいろ大変なこともありました。学園祭もその一つでした。露店の出店、舞台の担当、講演会の担当等、実行委員の方々はもちろん

ですが、みんなで成功させようと、一生懸命だったことは、今もすごく心に残っています。やり遂げた達成感は、よい経験になりました。

二年間は、あっという間でしたが、高短で学び、体験したことは、現在の自分にとって大切な二年間だったと実感しております。

卒業後、後輩方の活躍をメディアを通じて拝見する機会も数々ありました。その度に、うれしい気持ちになり、自分自身もがんばろうという気持ちにもなりました。今回の大学の再編により「高短」の名前がなくなってしまうのは、少し寂しい気持ちですが、名前は変わっても、今後も益々の活躍を期待しております。



現在の勤務先の職場の皆さんと新車の前で撮ったスナップ写真です。(2004年の夏頃)向って左端に写っているのが自分です。

略歴 昭和42年11月20日生まれ 63年3月 高岡短期大学産業情報学科経営実務卒業 63年4月 砺波信用金庫入庫 平成6年7月 退職 6年9月 小矢部興業㈱入社(建設業)(嫁ぎ先の父が経営している会社です) **現在** 小矢部興業㈱経理担当

高岡短大の思い出

木材工芸専攻 昭和63年卒業
片岸一利

高岡短大の思い出は、何と云っても新しい校舎で、先生・学生・職員の皆さん、全員が初めて顔を合わせ、これからこの生まれたての大学をみんなで創り育ててゆこうという前向きさと、はつらつとしてさわやかさが学び舎のここかしこに感じられたことです。

そして、地元産業界や地元伝統工芸業界からは待望の大学誕生で、期待の声が大きく報道され、将来、卒業生が地元で活躍してくれることへの思いがひしひしと感じられました。

又、校舎の図面を見ながら、校舎の周りにどんな樹木を植えようかと、木の種類・配置を考慮しておられた教官室の先生方の光景が今の脳裏に浮かびます。その樹木も今は緑豊かにうっそうと茂り、背も高く伸び枝をいっぱいに広げ学生の行きかう姿を見守り続けているようです。私は、社会人入学で入ったのですが、他にも10数名、社会人の方が各学科におられ、真剣に自分の目指すものに取り組んでおられた姿を思い出します。親しく交流させて戴いたことは今も楽しい思い出です。

先生方は、大変意欲に富んだ方ばかりで、相談に行けば親身に応じて戴き、親切に指導して下さいました。活気ある教官室の雰囲気からは、新大学への情熱が伝わってきました。特徴ある授業の他に、開放講座も大変思い出深いです。日中の授業を終えた頃からの時間帯で幾種類も行われる講座で、私は「ライフスタイル」講座を申し込みました。学生以外一般の地域の方々も受講することができ、20名以内の参加で行われました。講師は、ライフスタイルに関係する各分野の熟練されたベテランの方々でした。一言一句、熱心に語られ、どうこれから産業人として取り組んでゆくか、産業工芸に携わる者としてどう制作してゆくに



ついて、アドバイスや、体験談を聞かせて戴きました。このように卒業するまでの短い2年間でありましたが、意謝を持って、その世界にとび込めたことに悔いはなく、皆様に大変感謝しております。高岡短大の名はなくなりますが、充実した環境の学び舎はそのまま、2年制から4年生へと習得の時間が増え、自分の目指す世界へ向かって学べることは大変喜ばしいことと思います。新大学の末永いご発展をお祈り申し上げます。

略歴 昭和28年 富山県福光町生まれ 48年 井波彫刻伝統工芸士森好明氏に入門 63年 国立高岡短期大学第一期生木材工芸科卒業 平成5年 一級井波木彫刻士に認定 11年 井波彫刻伝統工芸士に認定

回想

情報処理専攻 昭和63年卒業
中村聡志

高岡短期大学創立22年、おめでとうございます。

私は1期生で入学致しました。1期生ということで、高岡短期大学では他では決して得ることがなかったであろうと思われる体験をさせていただいたと思います。また大切な友人たちにもめぐり合え、様々な体験を通して友情を深めることができました。

思いおこせば20年前、高岡短大の門をくぐりました。しかし高岡短大への進学は実は当時本意ではなく、心は決して晴れやかなものではなかったと思います。その上、大学がゼロからのスタートなわけです。このような状況で私が学んだ一番大きなことは、何かを行おうとするとき、どのように組織を立ち上げ、自分が動き、人を動かし、目的を達成するか、ということではないかと思えます。例えば学園祭などもそうですが、1年目ですから前例がありません。やりたければ自分達で考え、行動を起こし、互いに協力をしないと何も始まらないのです。大学創設時に入学させていただいたからこそこのことといえるでしょう。

在学中は何もわからず、ただ一生懸命だったのですが、振り返ると社会人として今に通ずるものを短大で学ぶことができたと思います。現在、会社にて私があることの基盤は、高岡短期大学にあったのではと思います。

そして、現在に至るまで親交が続いている親友に出会えたことも、大学で得られた貴重な財産であります。互いに、大学新設時を過ごし、大学を作ってきたという自

負が心の中に共通の財産として残っていることが、友情を強くしているのではないかと信じています。今は皆、結婚し子どももいる一家庭人ではありますが、年に1回、もしくは数回、会う機会を設け、当時の話に花を咲かせることができる大切な親友達です。彼らとの出会いがあったことにも、高岡短大に感謝する次第です。

もちろん学生の本分である学業についても短大では2年間の短い間に、多くのことを学ばせていただきました。幸い、卒業後は、学科で学んだ学問がそのまま生かせる仕事に就くことができました。今にして思えば、実にたくさんのごこと、貴重なことを経験し、学び、貴重な人たちと出会い、高岡短大が私の「進むべき道」であったのだと思うばかりです。

高岡短期大学は、一旦、短期大学としては幕を閉じ、新たに富山を代表する大学として生まれ変わるわけですが、私達が学んだ大学のままの姿であることを心より望んでおります。

